この音は、ただ君の為に。

月の城

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気付けば転生していたオリ主が、引き取られた家で聴いた箏の音に惹かれ、自身が満足する曲を見つける為に第２の人生を過ごすお話。

▼筆者は箏素人、楽譜も読めません。

▼アニメを視て衝動的に書いたので、続くかどうか不明。

▼更新は出来上がり次第になるので完全不定期。

▼この音とまれ！の二次創作が増えることを切に願いますｍ（＿）ｍ

目次

1話 1
2話 5
3話 12
4話 16
5話 21
6話 26
7話 32
8話 38
9話 46
10話 52
11話 58
12話 63
13話 70
14話 75
15話 81

1話

繰り返される月日が流れて早１５年。
今日から二度目の高校生活が始まる。
何が悲しくて一度は謳歌した高校生をまたやらなくてはいけないのか。
あ、遅ればせながら自分転生者です。
前世で見ていた二次小説であるあるの転生者になった模様。
ただ、俺が何で死んだかは分からないし神様とやらに会った記憶もない。

気付いたら、どこぞの病院にあるベッドの上。

何でも交通事故に巻き込まれたとか？
目が覚めてから病室に来たご老人にそう説明を受けても、他人事のように素っ気ない返事を返すことしかできない。
一瞬、ご老人の眦（まなじり）が下がったがすぐに戻り俺にこう提案してきた。

『これからお前は私と暮らすことになる』

ん？　おじいちゃんが俺の親ですか？
内心首を傾げるが、これはあれかな。交通事故で俺の両親が死んじゃったとか？
まぁ、ちょっと現状を整理したい気持ちもあったから話を早く終わらせるためにもここは頷いた。

そこからはもうあっという間。

ベッドから降りると視線の高さが低く、何故と思ったら体が子供になっていて仰天。
一緒に暮らすという爺さんの家に来たら、そこそこに大きい和風建

築で。目と口が開きっぱなし。

そんなこんなで暮らして早１０年。
爺さんは2年前に静かに息を引き取ってしまい、今は一人で暮らしている。
前世は特にやりたいことがなく流されるまま過ごしていたが、今世はちょっとした趣味が出来て、普段はそればっかり聴いている。
それは騒がしい教室に入っても止めることはなく、先生が来るまでずっとイヤホンを耳に挿していた。
入学式が終わって教室に戻ると、オリエンテーションとやらが始まったがツマラナイ。
周りは聞くに堪えない雑音だらけ。担任と思われる先生も何か気に入らない。
オリエンテーションとやらが終わってすぐに席を立つ。
今日はさっさと帰るとしよう。
ここにいるだけ時間の無駄だ。
家に帰っていつもの日課を済ますと、すでに夜の１１時過ぎ。
足元に散らばっている紙を踏まないように自室に戻ると、ベッドに倒れ込んで一日が終わった。

目が覚めて時間を確認すれば午前7時を過ぎたところ。
自炊は出来ないので、少し早めに出てコンビニで朝食を買い、昨日と同じようにこれから3年間通うことになるであろう時瀬高等学校の教室1―Eに向かう、
授業も前世で受けたものと早々変わらず、受ける価値がないと判断して昨日は持ってこなかったワイヤレス式のイヤホンを片耳につける。
幸いにも廊下側の席なので、注意すれば簡単には見つからないだろう。
そして放課後になり、コード式のイヤホンをつけて昨日と同じように帰ろうと昇降口に向かうと、正面から目付きの鋭いイケメン男子が

来た。
どこかで見たことがあると思いつつ、少し視線を向けると向こうも気付いたのか声をかけてきた。
「じろじろと見てんじゃねーよ、何か用か」
イヤホンで音楽を聴いていて何を言っているのか分からなかったので片耳だけ外す。
「ごめん、聞こえなかったからもう一度言ってもらっていい？」
「ああ？　何見てんだっつったんだよ、てめぇ」
「どこかで見たことあるなぁと思って見てただけ、気に障ったのなら謝るよ」
舌打ちだけして通り過ぎていく彼を横目に、イヤホンを戻してどこで見たかを思い出そうとしたが結局思い出すことは出来なかった。
翌日、放課後に掃除があったので適当に済ませて帰ろうとしたら、担任と知らない教師が昨日すれ違ったイケメン男子を無理矢理連れて行く姿を遠くに見つけた。
まぁ、昨日の言動から何かやらかしたのかなと思う程度で、そのまま外に出る。
すると少し先で３人の先輩と黒髪の男子生徒が殴り合いをしていた。
殴り合いというか、黒髪の男子生徒が一方的に殴っていただけだけど。
俺には関係ないと思い、横を通り過ぎようとしたら一人がこっちに飛ばされてきた。
「やべっ！」
……わざとじゃないのだろう。黒髪の男子生徒が少し慌てたような表情が見えたから、こっちは特に気にしませんよ。
ただ、飛ばされてきた先輩の方は遠慮する必要がないかな。
腹に膝蹴りをぶち込んで吹っ飛ばすと、うずくまって吐いていたよ。汚ねーな。
あとは知らんとばかりにさっさと帰る。
教師に見られていたらいろいろとやばそうだけど、そのときは圧倒

していた黒髪の男子生徒も巻き添えにしてやろう。

面倒ごとは嫌いなのだ、うん。

2話

昨日の膝蹴りから1夜明けて、いつも通り先生が来るまでイヤホンで外界の音を遮断する。
先生が来たのでイヤホンを付け替えると、今日の午後は部活発表会があるという言葉が聞こえてきた。
はっきり言おう、クソ面倒。
ふけることも考えたが、帰りのＨＲを考えるとそれはまずい。
出席日数が足りなくなって面談とかも洒落にならないからおとなしく出るしかないか。
めっちゃ憂鬱。

そうして始まった午後の部活発表会。
端的に言えば頭痛い。
一発目に出てきた地元人気№1とかほざいていた軽音部。
最初の音を聞いた瞬間、あまりの不快感に顔を歪ませて、先生が見てようがお構いなくいつも持ち歩いているイヤホンでシャットアウトした。
ただ楽器を鳴らすだけならまだしも、あの連中は弾いている楽器のことなど関係なく痛めつけているだけ。
聞く価値もない。
周囲の生徒が俺を見て来るが、こんな吐き気を催す不協和音を聴いている周りが信じられない。
早く帰りたいな。
いくつかの部活紹介が終わって、うとうとしていたらステージに見慣れたものを運んでいる眼鏡の男子生徒がいた。
部活一覧を見ていなかったけど、この学校にもあったんだ箏曲部。
イヤホンを外して眼鏡君が鳴らす箏の音を聞くと、『六段の調』を演奏しているらしい。

聴いた感想として、音は出せているけど凄い下手くそ。
大分緊張しているのか音も震えているし、所々ミスもある。
しかし、さっきまでの部活動に比べれば大分マシ。
ただ、周囲は興味がないのか大声で話し始める。
常識のない奴らを見ると、去年の出来事を思い出してしょうがない。
箏の音が話声に掻き消されて我慢の限界だった。
「うるっせえんだよ、聴こえねぇだろが!!」
「うるせぇな、話すんだったら外で話せや屑ども!!」
どうやら俺だけでなく、我慢の限界を超えた人がいたらしい。
向こうは自分の椅子に足を叩き付けたらしいが、俺は端に座っていたのもあり座っていた椅子を蹴飛ばして壁にぶつける。

ガンッ!!

チラッと演奏していた眼鏡君を見たがどうやら演奏をするどころではなくなったらしい。
暇つぶしにもなるかと思ったが、この状態ではさっきみたいに箏の音を聞くのは無理だろう。
高校生の間はおとなしく過ごしていくつもりだったけど、周りがこんな屑ばかりだっていうんならもうどうでもいいわ。
椅子を蹴ったその足で体育館から出て、今日はそのまま帰った。
途中俺を呼ぶ声が聞こえた気もしたけど、阿保臭くて全部シカト。
おとなしかった前世と比べれば性格変わったよな、俺。ストレス抱えなくて済んで逆にスッキリしたけど。
少し早く帰れたから時間が余ったなぁ。
久しぶりに今の俺の保護者代わりになってくれた人のところに行くか。
「つーわけで、遊びに来たぞ。ばっちゃん」
「何がつーわけじゃ、それよりお前学校はどうした？」
「今日は部活紹介だとかで自由下校。時間が余ったから遊びに来たん

だけど邪魔だった？」
ふん、と顎で奥を指すと俺は笑いながら礼を言って店に入る。
俺が小さいころから使っている１３弦。
箏の前で正座して、イヤホンを耳に挿し目を瞑る。
聞こえてくるのはコンクールで弾かれたとある曲。
１音１音とても丁寧に弾くその奏者と、その音が醸し出す風景。それをイメージしながら、何度も何度も繰り返して聴く。
３０分ほど経って目を開けると、イヤホンを外して箏爪をつける。
ターン。
鳴らした音が消えるのを待って、もう一度同じ絃を弾く。
ターーン。
近い、けど違う。この音じゃない。もう一度。
タァーン。
駄目だ。今度は遠くなった。もう一度。
ターン。
弾き方を変えてもこれじゃ最初の音と変わらない。もう一度。
顎から流れ落ちた汗が俺の左腕に当たると同時に集中力が切れた。
結局、通しでそれなりに出せたのは４小節まで。そこから先はまた楽譜に起こすのとイメージですり合わせていくしかない。
一先ず、ご飯を食べてから今日までの出来を楽譜に残しておかないと。

「ほれ、終わったんだったらさっさとおいで。ご飯にするよ」
「ありがとう、ばっちゃん」
戸を開けて入ってきたばっちゃんが俺にタオルを投げ渡すと、すぐにご飯だと言って部屋を出て行った。
迷惑をかけっぱなし、凄い申し訳ない気持ちでいっぱいだ。
だから早く高校を卒業してばっちゃんに恩返ししたい。
小さいころから爺さんと一緒に俺の面倒を見てくれた数少ない家族なのだから。

昨日の疲れが残っていたのか、少し寝坊して1限の途中で教室に入ると俺を見ながらクラスがひそひそと何か話しているのが見えた。
あぁ～、そういえば昨日やっちまったんだっけ。どうでもいいけど。
「君！　今頃来て何していたの!!」
「ただの寝坊です、なんで俺に構わずどうぞ授業を続けてください先生」
そう言って堂々とワイヤレス式のイヤホンを両耳につけて席に座った。
先生が何か怒鳴っていたが、それを無視しながらノートを取り出して今日も音合わせをする。
授業が変わって、他の先生が来た時も同じように過ごす。
中にはノートを取ろうとする先生もいたが、廊下側にある教室下の小さな引き戸を思いっきり蹴って睨みつけると何かを言って引き下がった。
相も変わらず音楽を聴いているので何を言っているのかは知らないが、どうせ学年主任に報告だの保護者に連絡だのそんなところだろう。
生憎と登録している家の固定電話は俺以外が取ることはないから無駄に終わる。
しかし、今日1日は邪魔されまくったおかげか全然進まなかった。
さっさと帰ろうとしたときに、廊下を走っていくイケメン君が見え

る。
彼を見る頻度が高いのもそうだけど、見えた彼の横顔は何かを決意した力強い眼をしていた。
……ああいう人に箏を弾いてもらえれば、面白い音が出そうなんだけど……それは高望みしすぎか。

あれから少しして、珍しく気分がよかった俺は昼休みに持ってきた弁当を食べるために先日見つけた穴場に向かっていた。
場所はそう、数学準備室。
人の喧騒から離れたとこにあるこの教室は俺にとって楽園と言える場所だ。
今日もその楽園で有意義な時間潰しをしようと、扉を開く。
「ん？　誰だお前？」
ソファに寝転がりながらこちらを見る中々ダンディなおっさん。
いや、つか――。
「おっさん誰？」
少なくても1年の授業で見かけていないから高学年の先生だと思われる。
だが、マジかよ。俺の楽園、数日で消えたわ。
「俺は数学教師の滝浪涼香だ、こっちは答えたんだからそっちも答えろよ問題児」
「知ってるんじゃないっすか、問題児の神崎孝介。以後よろしくしないでいいですよ」
人がいたんじゃしょうがない、今日は昼休みが終わったらさっさと戻ろう。
近くの椅子に座ってコンビニで買った唐揚げ弁当を食べながらノートを机の上に立てる。
「お～、こりゃまた随分な問題児だな。ここ私用利用禁止なんだけど？」
「先生こそ、職員会議までの合間とかの私用利用はやめた方がいいで

すよ？」
　部屋に沈黙が生まれ、滝浪先生がため息を吐く。
「お互いに何も見なかった、それでいこうじゃないか」
「ええ、それで滝浪先生一つ質問よろしいですか？」
「なんだ、問題児」
「箏曲部の顧問って誰ですか？　入部届を出したいんですけど誰か分からなくて」
　答えが返ってこないのでノートから視線を先生に向けると、めっちゃ嫌そうな顔をした先生がいた。
　マジで？
「先に聞いておくわ、なんで箏曲部？」
「部活に入っておけば取り敢えず履歴書とかそういったことで書ける内容が増えるのと、少し箏は齧っているので他の部活よりかはまだましかなと思って」
「……本音は？」
「部員が一人っぽいんで、幽霊部員でも数がいれば部活として成立するんじゃないかなぁと思った」
　チラッと生徒手帳を見たが、部活として成立するためには最低５人以上の部員が必要と書いてあった。俺が入ったところで焼け石に水だろうが、あとは知らん。
　名前は貸してあげるから頑張れよ、眼鏡君。
「すげー面倒なんだけど」
「安心してください。授業が終わればすぐに帰りますし、必要なら大会とかも穴埋めで出ますから。つーか、部活動の顧問をしていれば少しでも手当が出るでしょ？　それに大会以外はあまり引率することのなさそうな部活の顧問をしている方が他の部活よりは楽だと思いますけど？」
　滝浪先生がさっきよりも長い溜息をついて体を起こす。
「無駄に知恵が回る奴だな、お前」
「すいません、俺子供なんで何言っているか分からないっす」
　頭をかいて左手をこちらに出す。

その手に俺が食い終わった弁当を入れたビニール袋を渡した。
「誰がゴミ渡せって言ったんだよ！　入部届だよ!!」
頭に当たるコースを避けると俺のカバンの中にホールインワン。
おお、ナイスイン。結局自分で捨てなきゃダメなのね。
「これは失礼、てっきり捨ててきてもらえるかと。えっと入部届は……」
カバンの中を探せども出て来るのはメモしたノートだけ。
おかしい、いつ出してもいいように適当に書いてカバンに入れておいたのに。
「今、ないんで今度出します」
「ここまで引っ張っておいてないのかよ、まぁいいわ。気が向いたらでいいから今度持って来い」
「ええ、絶対に持っていきますから待っててくださいね。滝浪せーんせ」
嫌そうな顔をする滝浪先生に向かって舌を出す。
人をからかうのは楽しいね。
さて、音合わせを――え？　授業だから帰れ？
ケチ。

3話

ねっむー。

時刻は日曜日、もうすぐ13時になる頃かな？

今日は駅の近くで開催される邦楽のイベント、春の邦楽祭に来ています。

しおりを見る限りだと、鳳月会がトップバッターで演奏するみたいだからそれだけ聞けばさっさと帰る予定。

こういうイベントにはじいちゃんと一緒によく来ていたから、その方面には顔を知られていたりする。

大会の場で演奏するときと、普段の日常での姿。

髪型、眼鏡、服装と外見が全く違うのもあって気付かれにくいんだけど、昔馴染みの連中には割とすぐバレたりする。

本当にすごいよね。演奏するときはウィッグまで使って長髪にしているのに、それでも看破してくるって……。魔眼でも持っているんじゃないかって疑ったけど、この世界にはファンタジー要素が全く見当たらないんだよ。

というわけで、今の格好はジーンズに、グレーのパーカーという地味目に固めております。

鍔付きの帽子もかぶっているから顔を見られる可能性も低い。

ぱーぺきだ。

「えー、みなさん。今日は春の邦楽祭へようこそいらっしゃいました。これから演奏されるのは、邦楽の魅力満載のプログラムなのでぜひ堪能していってくださいね！」

ごめんなさいね、最初に弾かれる『龍星群』にしか興味ないんでさっさと帰ります。

「では、まずトップバッター。箏曲鳳月会のみなさんに箏を披露していただきましょう！　曲目は、綾瀬タキ作曲の『龍星群』です!!」

司会者が横にはけると、着物を着た小学生の女の子たちが出てき

た。
随分可愛い子たちが出て来たなぁ。
つーか、この世界で箏を弾く子たちってみんなレベルが高い。
将来美人になるだろうなぁ、と思いつつも幼過ぎて恋愛対象には入りません。ロリロリの気持ちもわかるけど、俺はタメか年上がいいです。
ジャラン!!
演奏が始まり、周囲の喧騒が一気に静かになる。
……聴くだけ聴いてみようか。

近くのファミレスで遅くなった昼ご飯を食べ終えて、食後のアイスコーヒーを飲みながらさっきの曲を振り返る。
聴いてみた感想としては上手かった。
ただそれだけ。
実力は名門とうたわれるだけのことはあった。でも、俺が求めていたものは何もなかったことから無駄骨となってしまったわけなんだけど、なんだかなぁ。
このあとは帰っても特にやることがないし、ばっちゃんのところにでも顔を出すか。
マドラーでコーヒーを掻き回していると、どこかで聞いたことがある声が耳に入ってきた。
「マジか！　席空いてねぇーのかよ!?」
「すいません、只今満席でして少しお待ちいただくことになります」
「いいじゃんチカ、少し待ってよーよ。歩き疲れちゃったし、他の店に行くのも面倒だし」
あのイケメン男子は……よく見れば眼鏡君もいる。
他の連中は見たこともないけど、ん～。
お冷を取りに行くついでに入口で対応していた店員に話しかける。
「店員さん、彼らが良ければ相席でも構いませんけど？」

「え、よろしいのですか？」
「あれ？　お前確か」

　イケメン男子が何かを思い出そうとしているようだけど、眼鏡君に話しかける。
「俺はもうコーヒー飲めばお会計するだけだから悪い話じゃないと思うけど？」
「そうなの？　いいじゃん、席譲ってくれるってんだしそうしようぜ」
「俺も腹減ってるからそうしてくれると助かるな」
　眼鏡君の後ろから出てきたフワフワしている可愛い系男子と、おデブがささっと俺が座っていた席に向かっていった。
　おいおい、そこはお連れさんの意見も聞いてからにしなさいよ。
「すみません、うちの部員が」
「構いませんよ。それに部員ということは、廃部は免れたんですね」
　席に向かいながら口に出した言葉に、眼鏡君の動きが止まる。
「あ!!　どっかで見たことあると思ったら、お前部活発表会で椅子を蹴っ飛ばした奴か！」
　お、正解だ長髪ボーイ。
「そうだよ、初めまして箏曲部の皆さん。その節は失礼しました」
「いや、あれは聴いていない周りの連中が悪い。お前が謝ることじゃないだろ」
　いいやつじゃないか、イケメン男子。
　しかし、眼鏡君を除いた他の野郎どもが目をそらしたのは見逃さなかったぞ。
　ということは、イケメン男子以外の人は人数合わせか何かかな？
「つかお前、こんなとこに一人で飯食ってるってことは何か用事でもあるのか？」
「ん～、用事があったってほうが正しいかな。駅前で開催していた春の邦楽祭を聴きに来ててね、それが終わって知人の店に行こうと考えていたところ」
「すごかったよねー、あれ。最初に出てきた箏どうだった？　俺はも

う圧倒されちゃったんだけどさぁ」
う～ん、正直に言っても鼻につくだろうし。
かといって、この人たちとそこまで仲がいいというわけでもないから……ちゃっちゃか帰ろう。
伝票を持って席を立つと、濁した言い方で一言だけ告げた。
「音は合っていたから上手かったんじゃない？　じゃあ、あとは皆さんでごゆっくり」
外ッ面だけの音なんて今更求めてなんていない。
これも言っちゃうと、箏が上手い奴みたいに捉えられそうだ。よ～し、堂々と言えるよう爺さんみたいに頑張るぞ。
１，８６２円!?　俺そんなに高いの頼んだっけ……あ、あのチキンセットか。

4話

春の邦楽祭があった休日から2週間？　が経ちました。
煮詰まっています、非常にイライラしています。
なかなかいい音が見つかりませんが、どなたか拾ってくれていませんか？
つまらない授業時間が終わり、最近寄る頻度が増しているばっちゃんの家に向かっています。
びっくりだよね、どういう経路か俺の授業態度がばっちゃんの家に伝わって週に1回顔を出せっていう激おこのお電話が届きました。
最悪です。今までおとなしい優等生を演じていたのに、学校内での素行が完全に伝わりました。
顔を出すのは全然大丈夫なんだよ。
ただね、次学校から電話がかかってきたら1ヶ月仕事の手伝いをさせるって言われてしまったのが問題なんだ。
気晴らしをしているとき以外は、常に箏の音合わせをしているわけでして。
仕事の手伝いをすれば、夜遅くまで拘束されてしまいそんな時間は極端に取れなくなる次第で。
ばっちゃんも他の人たちも、俺のこと心配して言ってくれてるのは分かるんだ。

だからこそ心苦しい。

俺がやっているのはただの自己満足で、自分の作った音を早く聞きたいから他のことなんてどうでもいい。
って、思っている異常者なんて知られるのを怖がっている小心者が俺さ。
とにかく、夏休みまではおとなしくしてますよ。
そろそろ、もう一つの音合わせもしておかないといけない時期が来たからそれもやらないといけないし。

というわけで、ばっちゃんのお店に到着。
「ばっちゃーん。遊びに来た兼、箏を弾きに来た兼、晩御飯を食べに来たよ～」
いつものようにお店に入っていくと、俺の箏の近くにたくさんの13弦が置いてある。
……なんで？
「来たね、悪いんだけど箏はそのままにしておいてくれ。いちいち片付けるのも大変だからね」
「ん～それはいいんだけど、どうしたのこれ？　箏の教室でも始めた？」
全部13弦の箏か。
ともかく、合計で4つも箏が出ていれば俺もびっくりだ。
ここは楽器屋であって、箏の専門店ではないのだから。
「小生意気な小僧共が、部活の存続をかけて箏を弾かないといけないんだとさ。それもあって、少し前から夜の2時間ぐらいだけ場所を貸してやっててね」
「へ～、珍しいね。そういうのは、ばっちゃん断ると思っていたけど」
荷物を隅に置いてばっちゃんを見ると、笑っていた。
「なんでも、いい演奏を聴かせてくれるみたいだからね。聴いてみたくなったのさ」
「……そっか、それは楽しみだね。ちなみにその小僧共とやらはいつ来るの？」
「夜の9時前ぐらいには来るね。昨日は珍しく来なかったみたいだけど、毎日毎日ご苦労なことだよ」
それはまた、今の子供たちにすれば珍しいな。
俺だったら数日は来ない可能性が高いのに――飽き症ですから、自分。
「分かった、そしたらその小僧共とやらが来たら教えてよ。今日はそこまで深く潜らないだろうから、普通に声をかけてもらえれば気付く

と思うし」
「はいよ、来たら声をかけるからそれまでは使ってて大丈夫さね」
「ありがとう、ばっちゃん」
そのままイヤホンをつけて目を瞑ると、外の音が全く聞こえなくなる。
「ったく、深く潜らないといってもお前さんが箏を弾いているときは、声をかけられる雰囲気じゃないんだよ」
ばっちゃんが呟くように言った言葉も、孝介の耳には入っていなかった。

ガララララッ。
愛(ちか)たちが部室で初めて音が合った日の夜。
いつも場所を借りている仁科楽器のばあちゃんのところに箏曲部全員で来た。
というのも、夜慌ただしく出ていく4人に上達具合の速さから、何かあると思った鳳月さとわが問い詰めたことで発覚してしまったのが原因だ。
「今日は来たんだねお前たち」
「ああ、昨日は飯を食いながらみんなと駄弁ってたから来れなかった」
「そうかい、しかし……何か増えてないかい？」
「あ、バレた？」
愛の中学生時代からの友達で、ギター経験者の足立実康(さねやす)が頬をかきながら愛の横から出て来る。
「すみません…お邪魔してしまって」
「まぁ、もう一人二人増えようが変わんないさ。好きにしな——と言いたいんだが、今日はもう少し待っててくれ。先客がまだ弾いてるんでね」
「先客？　箏の音とか何も聞こえないけど？」

人懐っこく、抱き着き癖がある水原光太が箏のある部屋に向かうとばあちゃんと愛たちが後を追う。
タン。
「あ、本当だ。誰か箏弾いてるね」
「……そろそろかね」
「あん？　何がだよ、ばあちゃ――!?」
タラララン、タン、タタタタン――。
突如として聞こえてくる箏の音。
しかし、先ほど聞こえてきた1音とはまるで違う。
心に直接訴えかけるようでどことなく優しい音。
「おお、なんか上手いな。そう思わねチカ？」
実康が愛に話しかけるが、愛は返事をする余裕がない。
さっきまで、さとわの17弦を聴いてしまっていたがゆえに無意識にも理解してしまったのだ。
レベルが違う。
初心者とかそういったものじゃない。
音は素直だ。
経験者でも、その人の本質が音に表れる。だから、同じ曲でも演者によって受ける印象がガラリと変わってしまう。
――音は嘘をつかないから。
俺が何も言わないで立ち尽くしているのを見て、光太も部屋に入るのを躊躇ったらしい。
他の人も部屋の外で静かに弾かれる箏の音を聴いていた。
タン。
箏の音が止まると、ばあちゃんがいつの間にか持っていたタオルを持って部屋に入っていった。
「今日は随分と進んだみたいだね、来た時はイライラしてたみたいだけど」
「あ、分かっちゃった？　俺もここまでいくとは思ってなかったからびっくりしてる」
どこかで聞いたことがある声？

それも最近聞いたことがあるような……。
「それで時間だけど、もしかして過ぎちゃったかな？」
「過ぎはしたけど、来たばかりだから安心おし。丁度いいから、箏を出すのを手伝っておくれ。新しく二人来たからね、奥から出さないといけないんだよ。お前たち外で立ってないで部屋に入っておいで」
ばあちゃんの声で部屋に入った俺たちが見たのは、顔の汗をタオルで拭っているファミレスであった男だった。
「あれ？　また会ったね」

5話

珍しく音合わせが進んだと思ったら、まさかの連中と再会しました。

確か……ばっちゃんが言ってたのは小生意気な小僧で、部活の存続をかけて弾かないといけない……だったっけ？

小生意気は理解できるけど、部員は眼鏡君を入れて6人いるから必要条件を満たしているはずだし……なんで？

しかし、全員黙ったままこちらを見て来るのは変な感じ。

「立ったままでもなんだし、座ったら？」

「何でお前がばあちゃんの家で箏を弾いてんだ？」

イケメン男子と接点が増えてきたとはいえ、馬鹿正直に話すのは――。

しょうがない、所々省くか。

「ばっちゃんとは小さい頃から知り合いでね、たまにここの箏を借りて練習しているんだ」

「へ～、凄いね。俺たちも最近箏を始めたんだけど、なんか上手だな～ってのは分かったよ！」

「お～、それは嬉しいな。ありがとう」

やっぱり初心者だったか。

可愛い系男子の言葉に、おデブと長髪ボーイが頷くのを見るに初心者は3人でいいのかな？

イケメン男子も、手を見る限り箏をやっているような指先をしていないから初心者だと思うんだけど……どうでもいいか。

「(あの音が上手？　そんな言葉で済まされるレベルじゃないわよ)」

美人女子が小さな声で呟いていたけど、ごめんね。

俺は耳がいいからこの距離でも聞こえちゃうんだ。

近くにいたイケメン男子も聞こえたのか、美人女子を見た。

しかし、イケメン男子もそうだけど、あの美人女子もどこかで見たことがあるんだよなぁ。

見覚えがあるということは箏関連だと思うんだけど、……はて？

「さて、待たせちゃって悪かったよ。俺はもう帰るから練習頑張ってね」
「あ、待って！　俺たちと一緒に箏を弾こうよ、きっと楽しいだろうからさ！」
　誘ってくれるのは素直に嬉しいんだけど、ごめんね。
　初心者の君たちに合わせて、決まった音楽を演奏するってのは性に合わない――なんて言えるわけないよな。
「悪いんだけど、断るよ」
「え～！　なんで？」
　ぐいぐい来るね、可愛い系男子。
「多分だけど、君たち初心者だよね？　俺、人に教えるの下手くそでさ。結構きついこと平気で言っちゃうから空気最悪になると思う」
「そんなのこの女で慣れてるから気にしなくてもいいぞ」
「なんですって!?」
「まあまあ、二人とも!!」
　……へぇ～。気になるところがない訳でもないけど、いいメンバーじゃん。
　いつもの手でいくか。
「だったら、君たちの演奏聴かせてもらってもいい？　曲は何でもいいから、俺が気に入ったら君たちと一緒に弾くって約束するよ」
「随分と上から目線じゃねぇか、お前そんなに上手いの？」
「君たちよりは弾けるってぐらいだけど、俺もやりたいことがあるからね。俺が君たちと箏を弾くということに納得できる理由が欲しいだけなのさ」
　もしかしたら、君たちと一緒に弾くことで何か新しい発想を与えてくれるかもしれない。
　だけど、それはあくまでも可能性の話であって絶対じゃない。
　何度かそういった教室に入ってみたけど、合わなくてすぐにやめた。
　そういった経験があるから、あまり他人と弾くことにメリットを見出せなくなってしまったんだよね。

「悪いけど、今練習中で弾ける曲は僕たちにはないんだ」
眼鏡君が申し訳なさそうに言ってくるけど、そうだろうね。
初心者って言ってたし、それで何か曲を弾ける方がおかしい。
「……じゃあ、この話は『だから――』」
「だから、あと半月待ってくれないかな？　多分、来月の全校朝会の時に演奏する予定だと思うんだ。それを聴いてから判断してほしい」
しつこい性格をしているな、眼鏡君。
嫌いじゃないけど、時期的にタイミング悪いなぁ。
「はぁ。俺はそれでもいいですけど、他の部員の人たちもそれでいいですか？」
「いいじゃん！」
「面白そうだな」
「おうとも」
美人女子とイケメン男子以外の３人組が各々返事をする。
「楽しみにしてますね、ばっちゃーん。どの箏出すの？」
先に出て行ったばっちゃんの後を追いかけて部屋を出ていくと、後ろから箏の音が聞こえてきた。
あらら、随分とやる気を感じさせる大きな音じゃないの。
少しは……期待してもいいのかな？

部の存続をかけた全校朝会での演奏まで１週間を切り、初めて最後まで止まらずに演奏をした日の夜。
ばあちゃんの好意で居間にてお茶を頂いていた。
「あ～～、うめーっ。ばあちゃんのいれてくれたお茶好き!!」
「ほっとするよね～」
「このせんべいうめぇな」
実康たち３人組がまったりしている中、愛がにやけながらばあちゃんに顔を向ける。

「なあなあ、ばーちゃん。どーよ俺らの演奏？　だいぶ良くなってきただろう」
「……そうだねぇ。ま、形にはなっているよ。テストとかなら合格ラインじゃないかい？」
「なんだよ、その言い方」
　ばあちゃんがお茶をすすりながら答えると、愛の顔が納得のいかないような顔つきに変わる。
「あんたたちはこの演奏で学校中を納得させたいんだろう？　そこにいるお嬢ちゃんはよく分かってると思うが、曲で人の心を動かすってのはそう簡単なことじゃない。でも、あんたたちはよく練習している。手もよく動いてる、パワーもある。――――あとは、弾く時の気持ちの在り方じゃないかい？」
「気持ちの……あり方……？」
「そうだ」
　話を聞いていた光太が疑問に思った点をばあちゃんに問う。
「何のために弾くのか、誰に届けたい音なのか？　ちょっと意識するだけで音色はガラリと変わるモンさ」
　そこで湯呑みを置くと、笑いながら愛達に語り掛ける。
「大事な人に、大切な言葉を投げかけるように弾いてごらん。音は、言葉で上手く気持ちを伝えられない人のためのもう一つの言葉だよ。不器用で、誤解されやすそうなあんたたちにぴったりじゃないか」
「……あいつの音を聴いたときに感じた。力強い音の中に悲しい音がいくつか混じっていたのは何かを伝えたいからなのか？」
　愛がばあちゃんに聞くと、ばあちゃんとさとわの目が見開かれて愛を見る。
　箏を始めたばかりの愛が、音に乗る感情を理解していることに二人は驚愕したのだ。
「源と一緒で耳がいいんだね、あんたは。そうさね……孝介にも事情というモノがあるから私の口からおいそれと喋るわけにもいかないんだが……。もし、あんたらが孝介と一緒に弾こうというのなら一つだけ伝えておこうかね」

お茶を飲んで真面目な目つきで愛たち全員を見る。
「孝介が誰かと箏を一緒に弾いていたのは、二年前にあいつの祖父が亡くなるまでだ。それ以降は、誰とも一緒に弾いたことがないんだよ」
「そんな！　あの音は確かに――」
さとわが珍しくばあちゃんに向かって声を荒げたが、最後まで言い切ることなく俯く。
何を言おうとしていたのか愛たちは予想できなかったが、ばあちゃんただ一人理解を示したようだ。
「そうかい、――お嬢ちゃんは分かったんだね」
「何がだ？」
「……これぱっかりは自分で気付かないと意味がないよ。とにかく、私が言いたいのはこれさね。孝介が誰かと一緒に弾くということは、その人を認めたときだけってことだ」
「……二年間誰とも弾いていないってことは、その亡くなったというじーちゃんがあいつの認めていた人ってことか？」
ばあちゃんが頷くと、さとわが問う。
「その亡くなってしまったという方の名前は？」
「朝霧劉生（りゅうせい）、異端と言われて隠居した頑固爺だよ」

6話

「ねぇねぇ、例の対決って今日なんでしょ？」
「あ、それ聞いたよ！　例の箏曲部ＶＳ教頭のやつ」
「ホントにやんのかそれ？　冗談じゃなく？」
　うるさい。
「久遠とかすげー暴れたりするんじゃねえの？　ハタから見てる分には面白れーけど」
「てか、なんで箏曲部？」
「似合わねぇ」
　耳障りな音が周囲を満たしている。
　正直、ここまで煩いと朝礼なんか関係なく帰るんだが……、俺にはばっちゃんというカードを学校側に握られているのでこの前みたいなことは出来ない。
　それに、周りの雑音の中にあった箏曲部と教頭の対決。
　以前、ばっちゃんの家で聞いた全校朝会の演奏という単語から今日あの眼鏡君たちが演奏するのだろう。
　しかし――――早くしてほしい。
　イヤホンも充電が切れたから教室で充電中、予備のコードイヤホンも忘れたから顔をしかめながら待っているのだ。
「えー、では続きまして箏曲部の発表に移りたいと思います。発表に関して教頭先生よりお話があります」
　やっとか、つかマジで周りが煩い。
「あ～、いつもならここで朝会を終える所なんだが、今日は特別に君たちに見て判断してほしいことがある。我が校にある箏曲部の存続を認めるかどうかだ」
　お、眼鏡君と長髪ボーイが出てきた。
　うん、少し楽しみにしていたから心を落ち着けないと。こんなささくれだった気持ちでせっかくの演奏を聴きたくない。
「約1ヶ月前、彼らは私とある約束をした。その約束が果たせなければ、箏曲部は今日限りで廃部となる！　――そして、その約束とは、今

日この場にいる全員を納得させる演奏をするということだ」
ザワッ。
「は？　何それ、意味分かんねー」
「つーか、何？　コト？　の演奏を聴けってこと？」
「ケンカすんじゃねぇのかよ、つまんねぇ」
……我慢、我慢だ。
「私からは以上だ。箏曲部の健闘を祈る」
あちこちで喧騒が大きくなる。
イライラが溜まっていくが、壇上にいる６人は随分と落ち着いている。
うん、リラックスして演奏に臨む。当たり前だけど、それが出来る人は極めて少ない。
誇っていいと思うよ、みんな。
「うわ、ほんとに弾くんだ」
「熱いね～」
「私たちまで巻き込むなよって感じだよね、正直どうでもいいし」
だったら帰れよ！
と、叫びたいが俺の勝手で眼鏡君たちに迷惑がかかる。
クッソ。

教員たちが立つ場所。
その校長先生の隣にばあちゃんがいた。
「悪かったね、無理言って中入れてもらって。部外者だってのに」
「何言ってるんですか。シズさんには、ずっと我が校の箏曲部の面倒を見てもらって来てるんです。それに――――実は昨日工藤君が私の元に来ましてね。『当日、すげーいい演奏を聴かせるって約束したんでいいっすか？　いいっすよね』だそうです。慕われてますねぇ」
「ふん、あんたも意地が悪いね。校長のあんたが一言、部を存続させる

と言ってやればこんな大袈裟なことにはならなかっただろうに」
「ふふっ、だって面白いじゃないですか？　頑張っているのになかなか周りに見つけてもらえない子。黙っていても悪目立ちしてしまう子。正反対の二人が並んだあの日から、私はなんだかずっとわくわくしているんです。この子たちが奏でる音は一体どんな音なんだろう？　そして、理解を得られず孤独に弾き続ける彼もいつか……」
「そうかい、あんたも事情を知っているんだったね……」

イケメン男子が箏の前に座ると、体育館中から笑いが溢れる。
「ぶふっ、まじで!!」
「久遠、あいつもまじでコト弾く気か!?」
「嘘だろ、超うけるんだけど」
ギリッ。
「ええと、全校生徒の皆さん。僕たち箏曲部は――『いいからさっさとやれよ！』」
眼鏡君の言葉を遮って、どこかの馬鹿が声を上げる。
「俺らの貴重な時間を使ってつまんねぇ演奏聴いてやんだからよー」
「そーだ、さっさとやれよ！」
「コトなんか弾くより教頭と喧嘩した方がはえーんじゃね？」
あぁ、……限界だわ。
ガタン!!!
俺が声を上げようとした瞬間、イケメン男子が椅子から立ち上がり一睨みで場を鎮めた。
ちっ、転生してから汚いモノばかり見てきて喧嘩っ早くなった自覚はあるけど、イケメン男子が我慢したんだったら俺も喧嘩沙汰はやめておこうか。
――暴力は、ね。
「いちいちうるせぇんだよてめぇら」

静かになった体育館内で響く俺の声に、皆の視線が集まる。
「耳障りな声で喋らないと人の話聞けないってんなら、お前ら全員の喉潰すぞカス」
右手の骨を鳴らしながらゆっくりと握りこぶしを作ると、俺の周囲に空間ができる。
いいぞ、これで大分聴きやすくなった。
教師が何か言いそうだったのは先に睨みを利かせておいたおかげで何も起きない。
今時の教師なんて、進んで面倒ごとには関わろうとしないゴミばかりだから大丈夫だとして。
「話の腰を折ってすみません、どうぞ続けてください」
眼鏡君に向かって一礼をして謝る。
二度も彼の場を壊してしまったのだ、あとでまた謝りに行こう。
「――おかしければ笑ってくれて構いません、つまらなければ文句を言ってくれて構いません」
眼鏡君が手に持っていた紙を握りつぶして、何か決意をしたような顔をしている。
「それでも、大事な仲間を、居場所を失いたくないので僕たちは最後まで真剣に弾き切ります」

彼らがそれぞれの箏の前に座る。

さぁ、見せてくれ。聴かせてくれ。君たちの音を！

ザァァァァァァァ、ダラララララ!!!
ジャララララ。
ダンッタララ、ダンタララ!!
「ちょ……え？　何これ……コトってこんな音――」

ダラララララン。ピキキキキ。

美人女子のソロパートに入るまでは今のところ目立ったところはない。
初心者ばかりだと聞いていたから、もっと簡単な曲と思っていたらまさか『龍星群』とはね。
インパクトが強い分、確かにこういった場に合っている。
そのせいで、彼女だけレベルが違いすぎて浮いているのが一目瞭然だ。
この17弦を使ったソロパート、俺の解釈では龍の鳴き声を表すものだ。それを彼女は龍が孤独で泣いているような音を出している
意識的……ではないのだろう。彼女の表情を見ればわかる。
あれは彼女の心境が無意識に箏の音に乗っているだけだ。
ソロから合流して、――この感じだと次のソロは一(いち)コトのイケメン男子君かな？
ピンッ。
ダッ。
可愛い系男子の入りそびれた音から、おデブと長髪ボーイの音がずれ始める。
元の曲から離れていくけど……これはちょっとないかな。
ダァン！
と思ったら、美人女子が小節の頭を強くしてリズムを取りやすくしている。
うん、戻りはしたけど大分ぐちゃぐちゃだ。
初めて箏を弾く人には誤魔化せるけど、分かったのは彼女だけが少なくても音を理解しているということだけ。
とかなんとか、考えている内にイケメン男子君のソロパート付近まで来た。
ここまで荒れた曲を、君はどう弾くんだい？

ピィーン。

ゾクゾクッ!!

左手で口を隠すと、背中に立った鳥肌に身震いしてしまう。
粗削りだが、芯がしっかりとしている。
そして暖かく優しい音で、ここにはいない誰かに向かって弾いている。

『――俺の音が聴こえているか？』

直接心に語り掛けて来る。
シンプルにそう思わせる音を響かせるイケメン男子。
右手で左胸に手を当てて服に皺をつける。
予想だにしない余りの衝撃に、いつの間にかラストスパートに入っていた。
最後の盛り上がり。
考えるのをやめ壇上を再び見ると、六匹の龍が飛んでいる。

「すげーーーーー!!!!」
「何々。コトってこんなだったの!? すっごい迫力!!」
「鳥肌たったよ、やべぇーー!」

演奏が終わって周りが騒ぎ始める中、俺はこっそりと体育館から出た。
「随分とガタガタな曲だったけど……悩んじゃうなぁ」

7話

「かんぱーーい!!」
　教頭と全校生徒を納得させ、廃部の危機を乗り越えた箏曲部の面々は部室で打ち上げを行っていた。
「俺らすごくね!?」
「人生であんな拍手貰ったの初めてだぜ!」
「これでもう部は安泰だね!」
　いつもの3人組が肩を組みながら騒いでいた。
「うん、一時は本当どうなるかと思ったけど……みんな。精一杯頑張ってくれてどうもありがとう!」
　箏曲部の部長である武蔵が笑顔で実康たちに言うと、三人は揃って頭を掻く。
「な、なんだよー、照れるじゃねーか!」
「いや、むしろこっちこそ……。なんかさー、あーいうの……俺初めての感覚だったんだ。一つの事を一ヶ月間びっちりがんばって、本番で全力出し切って、誰かに認められて。弾き終わった後の熱気とか、全身痺れる様な感じとか――なんか、すげーいいなって思ったよ……とか言ってみたり……」
　最後は声が小さくなっていったが、光太と通孝が隣で聞いていてそれをいじっている。
　その言葉に武蔵は何かを感じたのか、先輩たちが書いた『めざせ全国!!』の紙を見て詰まりながらも話し出す。
「あ、あのさ!　――も……もしみんなが良ければ、こ、このまま……ぜ……全国……目指してみませんか?」
　一瞬の静寂のあと、五人それぞれ違った反応を見せる。
「うおおおー、いいねいいね!!　全国――なんかかっけぇじゃん!!!」
「俺もやりたい!!」
「この勢いでいっちゃおーぜ!!」
「やるからにはてっぺんとるしかねーだろ」
「私は最初からそのつもりですが」

思っていた反応と違ったことに、武蔵が慌てて聞き返す。
「ちょちょ……、いーの!? そんな簡単に……全国ってそんな生易しい場所じゃ……!!」
「「「俺らならダイジョーブ!!!」」」
間髪入れずに実康たち三人組が親指を立てて返すと、武蔵がそのまま前のめりになり四つん這いになる。
でも、他の五人が楽しく談笑する姿を見て笑みをこぼすと、もう一つ伝えなきゃいけないことを話す。
「それと神崎君のことなんだけど、朝会の後僕のところに来て来週辺りに部室に来るってさ」
また静寂が訪れたかと思えば、三人組のテンションが爆発した。
「本当ですかたけぞー先輩!?」
「やったー!! 新しい部員が増えるぞ!!」
「おう、これで俺も先輩と呼ばれるのか」
三者三様の喜び方に色々と疑問が武蔵とさとわに浮かぶ。
「足立君はまだ分かるんだけど、水原君と堺君の新しい部員? 先輩ってどういうこと?」
「だって、あの時神崎君は俺たちと一緒に弾くって約束してくれたでしょ? それって部員になって一緒に弾いてくれるってことだよね?」
「俺らの方が早く部活始めてるからな、少し先輩だろ?」
愛が納得したかのように左手の平に右手を打ち付ける。
「なるほど、確かに」
「違うでしょ」
愛とさとわが正反対の声を上げ、お互いに睨み合う。
その場がまた混沌としてきたが、武蔵が賑やかな5人を見て笑みを浮かべる。
――こんなのも、たまにはいいか。

――タン。

出来上がった曲を一通り弾いてみて、違和感がないことを確認した瞬間背中から畳の上に倒れ込んだ。
大会まではまだ日にちがあるとはいえ、後詰を考えればなるべく早めに曲自体は完成させておきたかった。
昔は馬鹿にしていたが、二度目の人生を経験していれば嫌でも認識せざるを得ない。

時間の流れは残酷なまでに早く過ぎるということに。

一週間学校を休んだこともあって集中してできたが、そろそろ学校に行かないとばっちゃんが何を言い出すか分からない。
昨日……一昨日？　もっと前だったかな？
一度ばっちゃんが家に来たのだが、俺の部屋を見て鍋にカレーを作って帰っていった。
休憩中だったから少し話はしたんだけど、何話したか忘れたな。
兎にも角にも、無断欠席も度が過ぎればばっちゃんの家に迷惑をかけてしまう。
徹夜で頭がハイになっているのは分かるけど、少し寝よう。
起きてから今日学校に行くかどうか決めよう、うん。

結局、少し寝るつもりがガッツリと寝てしまった。
疲れが溜まっていたらしい。
気が付けばお昼である。

…………飯食って学校行くか、メンドクサイ。

俺が教室に入ると煩かった喧騒がピタッと止んだ。
なんだ、黙っててくれるんなら俺がいるときは何も喋らないでほし

いね。
イヤホン越しとはいえ、騒音を完全にカットできるわけではない。
曲に集中したいから、この状態で一日過ぎるなら何も文句は言わないよ。
午後の二限を終えて、部室棟の方へ足を向ける。
帰ろうと思ったのだが、先週眼鏡君に顔を出すと伝えていたのを下駄箱で思い出したのだ。
といっても部室棟なんて来たのは初めてだから、少し探してしまったが無事に見つけた。
まさかこんな端の方にあるとは、大好きなものは最後まで残す派の人かな？　……馬鹿じゃねぇの。
部屋に入る前の常識として、ノックノック失礼しまーす。
「先週約束をしていた神崎ですけど、倉田先輩いらっしゃいますか？」
扉を開けて中を見ると、七人の男女がいた。
あれ～？　俺の記憶違いでなければ『龍星群』を弾いてたのって六人だったような？
「おぉー、待ってたぜ神崎！」
「神崎君が来たー!!」
「よく来たな新入部員」
三人組が歓迎してくれているのはなんとなく分かったけど、おデブが言った新入部員という単語に首を傾げてしまった。
そういえば入部届出してなかったな、そうなるとまだ所属してなかったはずなんだけど――まぁ、いっか。
「聞きたいことはいくつかあるんだけど、まず先に」
荷物を肩から降ろして頭を深く下げる。
「朝会の時は邪魔をしてすみませんでした。もし許していただけないなら気の済むまで殴ってもらってもかまいません」
「ちょ、ちょっと待って。なんでそんな物騒な方に話が進むの!?」
部活発表会とこの前の朝礼。
大会とかではタブーとして当たり前のことをしたのだ。
演奏中と演奏前の邪魔をした身としては糾弾されてもおかしくな

い。
「頭を上げろよ、別に俺らはお前の事怒ってねぇし殴りたいとも思ってないから」
イケメン男子が嬉しいことを言ってくれるが、今回一番迷惑をかけたのは眼鏡君なのだ。
彼からの許しを得ない限り俺は頭を上げるつもりはない。
「神崎君、僕から君に伝えたいことがあるとしたら一つだけだよ」
――ありがとう。
……は？
「あの時、工藤君のおかげで緊張が吹き飛んだ。そして、神崎君のおかげで覚悟が決まった。だから怒るよりも、僕は逆に君に感謝しているんだ。ありがとう」
眼鏡君……いや、まだ早いか。
俺は、この人を何も知らない。
「……分かりました、それじゃあこの件はこれで終わりにしておきましょう」
頭を上げて、荷物をまた肩に担ぐと気になっていたことを一つ聞く。
「ところで、頬を腫らしたそちらの人は？　この前の朝会の時には見なかった方ですが」
「あぁ、彼女は僕と同じクラスの来栖妃呂さん。先週から入った新入部員だよ」
頭から指先まで見たけど、少なくても箏をやる印象には見受けられない。
……関係ないか、誰が箏をやろうと俺には一切関係ないんだから。
「なるほど、よろしくお願いします。それで、箏を出していないということはもしかして部活休みの日でしたか？」
「休みではなかったんだけど、今度の邦楽祭に出場するための条件として定期テストで赤点を２つ以下にしないといけないってことを話していてね。急遽勉強会をすることにしたんだよ」
あ～、そういえばそんな条件あったな。

俺の場合は二度目ということもあって、軽い復習で済むけど他の人からすればそうでもないか。
しかし、邦楽祭ね。まさか出場する気なのか？
「そういうことなら、定期テストが終わったらまた来ようと思います。それでは」
軽く礼をして部屋から出ようとしたら、可愛い系男子が声をかけてきた。
「神崎君も俺らと一緒に勉強しようよ？　一緒にやった方が楽しいしさ」
彼に好かれる何かをした覚えはないけど、随分と積極的だな。
ただ、そこまで勉強しなくてもいい俺からすると長い時間拘束されるのは御免なわけでして。
「彼女と勉強会があるから、今度のテストのときにでもまた誘ってね」
手を上げながら部屋を出ていくと形容しがたい声が背後から聞こえてきた。
彼女？　そんなのいないよ。
俺にいるのは相棒だけさ。

8話

定期テストも無事に終わり、テスト前に交わした約束通り俺は今箏曲部の部室に向かっている。
あの面子を見る限りだと、イケメン男子とあの三人組が勉強と無縁そうに見えたけどはてさてどうなったことやら。

邦楽祭、正式には高校生関東邦楽祭と呼ばれている大きな大会だ。
他に大会がない訳でもないが、俺の覚えている中で大きな大会は秋冬に開催される全国大会予選。神奈川県予選は十二月だからまだ半年以上先。
となれば、眼鏡君たちが出場すると言っていたのも間違いなくこれだろう。

大会規模は、俺の住んでいる神奈川県を含めた関東の一都六県。
団体の部と個人の部の二つがあって団体の部は人数制限をかけていない。
共に各県（都）から優秀校、一人を選出してその中から最優秀賞を決める大会。

全国とは違う関東圏の高校生大会だが、全国常連校も普通に参加するから厳しい競争になる。
個人の部も演目はフリーだけど、基本的に高校生大会というだけあって団体の部ほど人は集まらない。
それでも上手い奴はゴロゴロとしている魔窟なのだから面白いわ。
そういった連中の曲は聴いていても不快に思わないから、後日郵送されるＤＶＤで何度も見返す。
――その予定なんだけど、な～んか嫌な予感がするんだよなぁ。

そんなこんな考えている内に、箏曲部の部室前に着いたわけなんだ

けどやけに賑やかだな。
来ると言った手前帰れないから、この前と同じ要領で行こうか。
「お疲れ様で～す」
ノックしてない？
細かいことは気にするな、禿げるぞ。
「ようこそ、神崎君。君もテストお疲れ様」
「お疲れ様です、あの程度でしたら全然余裕でしたね――って、滝浪せんせーじゃん。お久～」
なんか男４人が壁に向かってぶつぶつ呟いていたり、項垂れたいたりと面白い光景を繰り広げているけど更にその奥にいる人物。
数日の楽園だった数学準備室。そこで出会って以来エンカウントしなかった滝浪先生が椅子に座ってくつろいでいた。
今は教室が以前ほどの喧騒じゃないからまだマシだけどさぁ、あの部屋の方が静かで快適そうだったんだよなぁ。
「いつぞやの問題児じゃねぇか。随分と久しぶりな気がするな」
「一ヶ月？　は会ってないからそうなんじゃない？　あっ、ここで会ったのも縁だろうしこれ渡しておくよ」
カバンに手を入れて掴もうとしたら、先に口を出されてしまった。
「ゴミを寄越すなよ？」
「……んなわけないじゃないですか。以前話していた入部届っすよ」
ちっ、ボケを先に殺されたら何も出来んではないか。
素直に入部届を出すと、滝浪先生がさっと眺めて折りたたんでポケットに入れた。
雑だなぁ、まぁいいけどさ。
「え!?　なんか自然に入部届出してたけど本当に!?」
「駄目でした？　元々は1ヶ月前に出すつもりだったんですけど、やることがあって出すのを忘れてたんですよね」
ほんと、滝浪先生に会うまですっかり忘れてたわ。
人数もいるみたいだし、幽霊部員もいらないかなぁって思ってたところにあの演奏だもんな。

部室内が一気に賑やかになったが、このメンバーで気になるのは美人女子、あとは……イケメン男子ぐらいか。

美人女子は理解している。
俺と同じように小さい頃から箏を弾いているのだろう。

彼は音に気持ちを乗せるのが上手い。
俺のように空っぽの音ではなかった。

音の響きがまるで違う。
何度も何度も彼女は弾いてきたのだろう。

粗削りで雑な音ではあった。
でも、最後のソロで出したあの音は感じ入るモノがある。

彼女は俺よりも才能があって、努力もしてきた本物。
彼はまだまだ伸び盛りの初心者で、可能性を感じる原石。
対する俺は凡人で、理想だけを追い求めている紛(まが)い物。

それでも……俺は聴いてみたいんだ。
爺さんが言っていた――自身の手で奏でた音によって生まれる、……心が震える演奏ってやつを。

「少し、部の雰囲気というのを見たいので今日は見学させていただきますね」
「あ――、うん」
滝浪先生の横に椅子を持ってきて座ると、眼鏡君たちが箏の準備を始めた。
「一つ質問いいか、問題児？」
「何ですか滝浪センセー？」
小声で聞いてくるあたり、周りに聞かせたくない話なのだろう。

「入部動機、あれはどういう意味だ？」
「そのまんまっすよ？　彼らの演奏に気になる音があった。その音をもう一度聞いてみたくなっただけです」
最後のラストスパート。
龍を幻想させる演奏、それをこのメンバーがどうして弾けたのか？
動機としてはそれで充分じゃない？

しかし、イケメン男子は頭で釘を打つ練習でもしているのかな？
なかなかに面白いけど、周囲はちょっと引いてるのが分かる。
ん？　頭突きを止めたと思ったら、今度は美人女子に向き合ってどうしたんだ？
愛の告白とか？　そしたら全力でニヤニヤしながら見ててやろう。

「俺、お前の六段聴いてみてぇんだけど――駄目か？」
「え……」
「曲と向き合えって言われてもやっぱよく分かんねぇし、お前の六段聴いた方が何か掴める気ぃする。――つか、一度ちゃんと目の前で、鳳月の箏聴きたい。龍星群とか、なんだかんだ俺らに合わせてたとこあんだろーし」
その通りだよ、イケメン男子。
恐らく、彼女の音色があからさまに変わったのはソロパートのところだけ。それ以外では大分窮屈そうな音をしていたからね。
「そーいうんじゃなくて、全力で曲と向き合った本気の箏。駄目か？」
「それ、俺らも聴きてー！　つか俺ら鳳月さんの一七弦しか聴いたことないじゃん！」
美人女子が少し躊躇(ためら)った後、イケメン男子を見て表情が変わった。
そのまま箏の元まで行って座ると、目を閉じて雰囲気が一変する。

ターン。

……最初の一音で分かってしまう。

彼女が、この六段にひたすら向き合ってきたことを。

『六段の調』という古典曲は、流派によって伝わり方や教え方も全然違う。

出だしの「五」一つにしても、弾き方やテンポが個人によって異なる。

歴史がある分、色んな人の解釈や想いが積み重なって今に至る為、曲に凄く厚みがあるのだ。

彼女の演奏には、どことなく水の気配がする。

淀みなく、清流のように透き通った穏やかさ。

すでに、彼女は彼女なりに六段に対しての答えを出しているのだろう。

演奏が終わっても誰一人声を出さない静けさの中、滝浪先生が全員に問う。

「……なんだお前ら、こいつの演奏聴いてビビったか？」

美人女子の顔が一瞬強張ったが、長髪ボーイが体を震わせながら叫んだ。

「すげぇ……っ！　すげぇよ！　何かうまく言えねぇーけどっ、箏って……こんな風にも弾けんだ……はは。鳥肌とまんねぇ」

「俺も俺もっ。なんかすごい心臓バクバクしてるっ！　鳳月さんすごいよ、めっちゃかっこいい!!!」

「俺……音楽で感動したの初めてだ……」

「鳳月ちゃん……すてき……」

長髪ボーイの言葉を皮切りに、可愛い系男子とおデブ、ギャル娘が美人女子に声をかけていく。

「おーい、大丈夫か倉田ぁ？」

滝浪先生が呆然としている眼鏡先輩に笑いながら聞いているけど、あれは聞こえていないな。

あ〜あ、楽しそうな顔しちゃって。
そう、今のが六段という曲なんだ。

弾き手は違えど、楽譜を覚え、曲想から練り込み、それを弾き込んで初めて人に届く曲になる。

それを知ったところから初めてスタートラインに立てるんだ。
どうだい、眼鏡君――イケメン男子？
音楽って面白いだろう？
「どうしたらそんな風に弾けるようになんのか、教えてくれ!!」
イケメン男子が美人女子の前に正座で座り、いい顔……真っ直ぐな眼をしながら頼み込んだ。
「――同じように弾く必要なんてないわよ」
イケメン男子の顔が死んだ。
「え、や、そんなショック受けるような話じゃなくて……、今のはあくまでも私なりの六段だから。みんなはそれぞれ、自分なりの六段を弾けるようになればいいと思う」
「分かった！　で、それはどうやって弾くんだ？」
生き返った。
ああいうのって、傍から見てるとこんなに面白いんだな。
そんな風に思って見ていたら、滝浪先生がいいことを言った。
「なぁ、お前鳳月っつったっけ？　お前がそうやってサラッと言ってることって、こいつらにしちゃすげー高度なことだと思うけど」
「あ〝!?　うっせぇな、てめぇ話に入ってくんなよ！」
「あー、はいはい。邪魔者はそろそろ退散すっか。いーもん聴けたし」
滝浪先生が指摘したことで、眼鏡君とイケメン男子以外で固まっていた人たちの表情が崩れた。
そう、君たちみたいに曖昧でも理解できた人たちと違って、音楽という分野に入って間もない人たちに美人女子が言ったことは、時と場合によって悪意となってしまう。

今回の場を見てる限りだと、最終的に滝浪先生がヒール役になって部屋を出ていくみたいだ。
しかし、イケメン男子の怒りようだと滝浪先生と前に何かあったのかな？　他の人たちもさっきまでの固い表情からやる気にシフトしたみたいだし。
「あ、倉田。大会はちゃんと申し込んどいてやっからがんばれよ～」
バタンっと扉を閉めるとともに、イケメン男子たちが騒ぎ出す。
「おっしゃ、やるぜ!!」
「うおお、なんかすげー燃えてきたァア!!」
「やる気あるところにすみません、今日はこれで失礼してもよろしいですか？」
箏を弾こうとしていた全員が手を止めて俺を見て来る。
「もしかして、うるさかったかな？」
眼鏡君が苦笑いしながら聞いてくるけど、大丈夫ですよ。
見てて面白いので、この騒がしさは大して気になりませんから。
「いえ、部室に箏が足りないようですので後日に持ってきてから参加させていただこうかなと。それに滝浪センセーに伝え忘れたこともあったのを思い出しましたし」
失礼しましたの一言で部室を出て滝浪先生を探すと、幸いにも職員室に辿り着く前に見つけることが出来た。
職員室の中にまで入るのはさすがに面倒だったから、凄い助かる。
「滝浪センセー」
俺の声に反応したのか、足を止めて嫌そうな顔をして振り向く。
そこまで嫌がらんでもいいじゃん、まだ何もしてないよ？
「何の用だ、問題児？」
「滝浪センセーに一つお願いがあって追いかけて来たってのに、……反応が冷たい」
「気持ち悪いからさっさと話せ」
おちゃらけた雰囲気を消し、先生の顔を見る。

「邦楽祭の個人の部、俺の名前でエントリーしてください」

9話

「ソロ部門……あぁ個人の部か。え、なに？　お前、団体の部と両方出るつもりなの？」
「何でそうなるんですか？　俺が団体の部なんて出るわけないでしょ」
　最後の一言、寒気がするほど尖った一言だったのを涼香は感じ取ってしまった。
　自分の過去で起きた、一(ひと)場面を思い出すほどに。
「俺が入部したのは、この前の全校朝会で彼らの演奏で気になる音があったから。そう志望動機にも記載したはずですよ？　彼らと一緒に全国を目指すために入部したわけではない、だから団体の部に俺の名前は書く必要はありませんよ」
　神崎が離れていた距離を詰めると、カバンの中から丁寧に折りたたまれた1枚の紙を俺に渡してきた。
「学校応募用紙はすでにこちらで記入していますので先に渡しておきます。必要なのは先生のチェックと許可ですので、駄目であれば早めに教えてください。一般応募で出しますので」
『よろしくお願いします』の一言を残して、さっさと帰っていった。
　聞きたいことがあったのだが、あの目は余計なことを喋るなとでも言わんばかりの目付きでとても聞ける雰囲気ではない。
　単純に嫌われているかとも思ったが、あの雰囲気に似た奴を知っている為おおよその予想は付く。
「はぁ～、マジで面倒くさくなってきやがったなぁ」
　ため息と共に、神崎から渡された紙を持ったまま職員室に入っていった。

　後日と言って、二日後に箏を学校に持っていく俺。

時間のルーズさが右に出る者がいないと自負している身としては、今回は早く持ってきた方だ。
ばっちゃんに無理言って、1面貸してもらったわけなんだけど……これが重い。
楽器屋から学校までの距離を考えると、ヒッキーな俺の筋力じゃ時間がかかってしまってすでに放課後になってしまった。
授業？
そんなもの午前中だけ受けてあとはボイコットに決まってるだろ。
お昼はちゃんと食べましたとも、ばっちゃんの味噌焼きおにぎり美味かった。
やっと部室の前に着いたと思ったら、部屋の中から聞き覚えのある曲が聞こえてくる。
正直言って下手くそすぎて参考にはならない。
ならないけど、四苦八苦して弾いているのだろう。
一昨日、美人少女が言っていた自分なりの六段というのを模索しているを感じる。

――お前みたいな適当に弾くやつと一緒に弾きたくない!!――

……ちょっと嫌なこと思い出したな。
でもま、休憩がてら演奏が終わるまで外で休ませてもらうとしますかね。
楽器を立てかけ、壁に背を預けるとそのまま座り込む。
下手くそだけど……、まぁ悪くはないかな。

愛たちが六段を弾き終わって少し休憩していると、部室の扉が開いて先日部員になった神崎が箏を持って部屋に入ってきた。

「どうもお疲れ様です」
「お疲れ、ってかお前大丈夫か!?　大分汗かいてるけど?」
　空いているスペースに箏を置くと、カバンからタオルを出して顔を拭き始める。
「全然大丈夫じゃないです、暑いの苦手なのに何で今日に限ってこんなに暑いんですかね?　ほんと、雪でも降ればいいのに」
「神奈川で雪って、変なこと言うなお前」
　タオルで拭いている手が一瞬止まったが、すぐに動き出した。
「では、改めまして1年の神崎孝介です。箏に関しては小さい頃から触っていますのでそこまで素人ではないと思っています。多少口の悪いところもありますが、今後ともよろしくお願いします」
　タオルを置いて急に挨拶を始めた神崎だったが、頭を下げたと同時に拍手で迎え入れた。
「よろしく〜!!」
「これからよろしくな」
「一緒に頑張っていこうぜ」
　三人組のいつもの挨拶と共に、神崎が正座して武蔵に質問をした。
「来るときに何かを演奏しているようでしたけど、何を?」
「僕と鳳月さんと来栖さん以外で六段を弾いていたんだ。工藤君たちが自分なりの六段を考えて来たみたいでね、それを聴いてたんだ」
　神崎が左手を口元に当てて考えていると、ふと視線が来栖の指に向かった。
　来栖本人も突然見られて困惑していたが、神崎が視線を切ってまた武蔵に向かう。
「先に聞いておきたいんですが、以前に邦楽祭に出るという言葉を聞きましたけど、それは高校生関東邦楽祭で間違いないですか?」
「うん、その邦楽祭で間違いないよ」
「神崎君も一緒にその大会で頑張ろうね!」
　光太が乗り出して神崎の手を掴んで振り回す。
　男女なら美しい光景になるかもしれないが、生憎と男同士。
　神崎が光太の手から自身の手を引き抜くと、拒絶の言葉を放つ。

「悪いんだけどそれは無理、邦楽祭の団体の部がある日って用事があるんだよね」
「えっ……？」
光太が唖然とした表情で神崎を見ているが、神崎は持ってきた箏を調弦しながら続きを話し始める。
「もっと正確に言えば、今後の団体戦には一切出場しませんのでそのつもりでいてください」
調弦が終わったのか、片耳にイヤホンを挿して箏の前に座り直す。
「ちょっと待てよ、それはどういうことだ？　俺らと一緒に箏を弾かないってことか？」
愛が神崎を睨んでいるが、神崎はそれを意にも介さず箏に視線を向け続ける。
「そうは言っていないよ。練習で一緒に弾く分には問題ないけど、大きな大会とかそういった公式の手合いには出ないってだけ」

一音。

箏を鳴らし再び左手を口元に当てるが、何かを考えているかのようでイヤホンを外してさとわに視線を向ける。
「まどろっこしいのは面倒だし、率直に言うね。君たちのような下手くそと一緒に演奏したくないんだ」
「なんだと！」
実康と通孝が腰を上げたが、愛が腕を前に出してそれを止める。
二人は何かを言いたそうだったが、神崎の方に視線を向けて黙っている愛を見て大人しくまた腰を落とした。
「正確には鳳月さん？　君の演奏が飛びぬけて際立っているせいで俺にはひどく不協和音に聞こえてしまう」
「それはただ単にお前の耳が変だっていうことだろう」
「……そうだね、そう言われてしまえば何も言い返せないな。というわけで、そんな俺の耳だと君たちとの演奏に合わせることが出来ないから団体戦には出ないってこと」

「だったら俺らと一緒に練習すればそんなこともなくなるって」
光太がめげずに、再び神崎に呼びかけると軽くため息をつかれる。
「だったら、今一緒に弾いてみようか？　君たちが全校朝会の時に弾いていた『龍星群』でいいかな」
「『龍星群』って、お前弾けるの？」
愛が鋭い目付きで尋ねるが、愛に視線を向けると無表情で瞼を降ろした。
「それに関しては問題ないよ。去年に直したばかりだから、さっき聴いたのですぐに弾けるし」
「直した？」
武蔵の言葉に答えることもなく、神崎はカバンからボイスレコーダーを取り出した。
「後、ぶしつけながらすみません。この部活の間皆さんが弾く曲を録音させてほしいのですがよろしいですか？」
随分と勝手に話が進んでいく状況に姫呂がキレた。
「さっきから聞いてればあんた何様なの!?　つか、ところどころ敬語とタメ口が混ざっているのも気持ち悪いし」
一瞬だけ姫呂に目を向けた神崎だったが、すぐに視線を外して口を開く。
「そういえば、貴方はあの場にいなかったですね。口の悪さに関してはこの人たちに最初に言ってましたよ？　そこにいる水原君に部活に誘われた時にね。敬語の方は、まぁこれをメインで話しているから話慣れてこうなったとしか言えないですね。それに――」
愛に向かって今度は鋭い視線を向けると、以前交わした言葉をもう一度紡ぐ。
「一緒に弾くって約束は、俺が君たちの演奏を聴かせてもらって気に入ったらという約束だったはずだ。元々入部届は出すつもりだったから、君たちの全校朝会の時の演奏は、正直判断に困っててね。こっちのほうが手っ取り早い」
愛と神崎が睨み合う状況が少し続いて、その緊迫した状況が一変したのは第三者の声だった。

「やりましょう」
「鳳月？」
「どちらにしろ、このままでは埒が明かないわ。それに下校時間がもうすぐだから、あと一曲しか弾けないのだったら神崎君の腕を知る為にも一度は一緒に弾いた方がいいと思う」
その言葉に、周りが言いたいことを呑み込んだのか、姫呂以外の全員が調弦を取る為にそれぞれ座り始める。
「あと、弾く前に一つだけ。途中で何があっても、最後までそのまま通しで弾いてください」
「どうして？」
「演奏を途中で止めてしまったら、――判断できなくなってしまうので」

そして、七人で弾いた『龍星群』を聴いていた姫呂は、全校朝会の時に聞いたものと違いひどくずれた曲だと演奏後に武蔵たちに語った。

１０話

「すみません、朝早くから」
「いいさ、５時には起きてる。ほれ、そこにあるのが全部楽譜だよ」
　登校前、仁科楽器に邦楽祭で弾く曲を調べる為、前日に連絡を入れていたのだ。
「わっ、すごいたくさん……」
「邦楽祭用に弾く曲を探しに来たんだろう？」
「はい、いつも箏関連は鳳月さんに頼ってばかりだし、久遠君やみんなも凄く頑張ってて……。それに、――先日神崎君と弾いた『龍星群』で変な感じを覚えてしまって」
「変？」
　言うべきかどうか悩んだが、神崎君がお世話になっている静音（しずね）さんなら伝えても問題ないかもしれない。
「神崎君が弾いたのは十三弦でした。楽譜にない音を、終始変なタイミングで弾いてくる。一緒に弾いている僕たちでさえ、リズムや音を何度もつられて間違えました」
「――孝介の奴、最初から弾きおったな」
　額に手を当てて、ため息を吐く静音を見ながら『それに、』と武蔵は言葉を続ける。
「実康くんと来栖さんは怒ってました。水原君は苦笑いでしたし、堺君もなんとも言えない顔をしていたのを覚えています。でも――、鳳月さんが信じられないような顔を、久遠君が拳を握りしめながら神崎君を見ているのを見て思ったんです。僕たちには分からなかったけど、二人には神崎君の演奏に感じる物があったんじゃないかって」
　実際、あの演奏の後で怒っていた二人を止めて久遠君が言った一言。
『いつか、絶対に俺らと一緒に演奏したいって言わせてやる』
「――だから、僕も部長としてもっともっと頑張らないとって思いま

して」
「真面目だねぇ。孝介のことはおいておいても、あんまり肩に力入れすぎるんじゃないよ？　源の孫にそんなこと言われたら、孝介もすぐに部活を辞めるということはしないだろうさ」
　棚の扉を開けながら静音が楽譜を何枚か出す。
「ところで、やりたいのは現代曲と古典のどっちだい？」

　ハロハロー。
　今日は過ごしやすい気温で、とても機嫌がいい神崎です。
　現在、職員室で滝浪センセーに邦楽祭のことについて聞きに行ってそのまま部室に向かっているところ。
　前方から来た他校の制服を着た女子二人とすれ違ったが、見学かなと思ってスルーする。
　部室棟から来たってことは、来年に入学する子たちの部活見学だと思う。
　熱心な中学生がいたもんだ、うんうん。
　とかなんとか考えている内に部室の前に到着。
　しっかし、俺の演奏の後って絶対文句が出るんだけど――イケメン男子の一言には驚いたなぁ。……本当に驚いた。
「お疲れ様でーす」
　部室に入ると、机の周りに全員が集まっていた。
「お疲れ様、神崎君」
「何をしてるのです――って、楽譜ですか？」
　美人少女の手に『久遠』と書かれた懐かしい楽譜がある。
　他にも机の上に二冊の楽譜が置いてあった。
「『久遠』……ですか？　それと、そっちには『石筍』に『四重奏』も」
『石筍』と『四重奏』は、大会でもよく弾かれるメジャーな曲だから特に変なところはないが、『久遠』は別だ。

俺が小学生の時、初めて爺ちゃんに聴いてもらった曲だ。
「邦楽祭で弾く曲ですか？」
「そうよ、何か文句ある？」
ギャル娘が睨みながら俺に反論してくる。
「ありませんよ？　俺には関係ないですら。それで、演奏するのは『四重奏』ですか？」
「いや、『久遠』でいくことに決まったよ」
マジかよ。
『久遠は』、一コト、二コト、三コト、一七弦の四重奏で奏でられる。途中途中で、パートがＡとＢの二つに分かれる所はかなりの難所だ。
俺と弾いた『龍星群』を抜きにしても、あの全校朝会。三人組のタイミングの危うさを見れば、とてもじゃないが弾けるとは思えない。
「随分と難しい曲をチョイスしたんですね。頑張ってください」
「あれ、神崎君この曲知ってるの？」
「まぁね、小学生の時に弾いてたし」
可愛い系男子、ギャル娘の反応が普通なんだよ？
君みたいに、先日の一件があって本人たちを前にしてそんな態度でいられるなんて……天然？　うん、次から天然君でいこう。
「だったら弾いてみてくれよ、俺ら誰も聴いたことがない曲なんだ」
君もか、イケメン男子。
そもそも、俺が満足に弾ける『久遠』はその楽譜に載ってないんだよな……。
でも、この前の『龍星群』でも……しょうがない。
「一度だけならいいよ、一コトでいいかな？」
持っていた荷物を置くと、箏の前に座り調弦をして爪をつける。
「一コトって難しいんでしょ、あんたに弾けるの？」
「弾くだけなら問題ないですよ、質は大分落ちますが」
そう弾くだけなら問題はないのだ。
あっちを弾かないのであれば、曲を聴く必要もないしそのままいこ

う。

ジャララジャララジャララジャララ。

出だしの音を弾きながら、考えてしまう。

ここにいる人たちは、何故俺が部室にいることに文句を言わないのか？

まぁ、突っかかってくるギャル娘はいるが、一緒に怒っていた長髪ボーイが今日は俺の演奏を真剣な眼で聴いているのが気になる。

それだけでなく、おデブと天然君もじっと聴いていれば、イケメン男子は目を吊り上げてるのか？　とにかく凄い目付きで俺の手元を見ているのを感じる。

俺だったら、初日にあんなことがあれば嫌悪感がにじみ出るもんだと思うんだけど、それが全くないし……本当に変な人たち。

ジャララララン。

弾き終わって一息つくと、イケメン男子と美人女子以外の全員がまばらではあるが拍手をする。

「本当に弾けたんだな。疑って悪かった」

「途中早すぎて、目が追いつかなかったぜ」

「なんで本気で弾かないんだ？」

「どうしてそんな演奏したんですか？」

同時。

イケメン男子と美人女子が異なる発言をしたが、お互いに見ることもなく真っ直ぐに俺を見て来る。

美人女子が突っ込んでくるとは予想できたけど、まさかイケメン男

子もとは――予想だにしなかった。
「鳳月さんは分かるけど、まさか久遠君もか」
「あぁ！　俺だとなんかあんのか!?」
「ないよ、意外だってだけ」
　周りを見る限り、この二人以外は言っていることがよく分かっていないようだ。
「ちゃんと楽譜の通りに弾いたはずだから問題ないと思ったけど？」
「音程なんて知らねぇよ、まだ楽譜を見てねぇし。ただ、この前の『龍星群』で感じた何かが今回はなかった」
　視線を美人女子に向けて理由を聞こうとしたが、俺はそれをとても後悔した。
「確かに音は合ってたと思う。でも、以前の『龍星群』と違って中身がない。それじゃあ、ただの楽器を奏でているのと大して変わらないわ」
　――はっきりと言ってくれる。
　自分でも分かっているからこそ、他人に指摘されるとなおさら来るものがあるというのに。
「確かに、今の演奏だとそういわれても仕方がないか。だったら、こうしよう。小学生の時に弾いていた『久遠』、それを君たちが『久遠』を弾けるようになったら改めて弾くよ」
「なんだ、また条件かよ」
「俺の弾く『久遠』は、何も知らない君たちに聴かせてしまえば変に先入観を持たせてしまうし悪影響が出る。だったら、自分たちで練習して曲想もしっかりとしたものが出来上がって聴いた方が感じ入る物があると思うよ？」
「じゃあ、練習しよう！」
　話の会話の終りに、ギャル娘が大きな声で叫ぶ。
「生意気なあんたに、いちいちあれこれ言われるのも癪だわ。だったら、あっと驚く演奏聴かせてやるんだから覚悟しなさい!!」
「おうよ！　神崎だけじゃねぇ、あいつらもギャフンと言わせてやるぜ!!」

「そうだそうだ！」
よく分からないまま、俺を置いてみんな練習し始めた。
あいつら？　っていうのが誰か分からないけど、ここにいる人たちは本当にブレない。
美人女子主導で各パートに振り分けて練習しているみたいだし、ギャル娘も初めて会った日にしていた付け爪も先日会ったときに外していた。
今まで会ったどの集団とも違うから――やり辛い。

一時間後
イケメン男子たち四人が死屍累々のお通夜状態なのを見て、そりゃそうだろうなと少し笑ってしまった。

11話

タッタタタン、ジャラララン。

これだと一コトより強いか。

最初から。

――――ターン、タンジャララララン。

今度は二コトと合わない。

……難しいな、この曲。

イケメン男子たちが『久遠』を演奏すると言っていた翌週の土曜日。

待ち合わせ場所でもあるカフェの一角で、ある曲の音合わせをしていたが中々に難航している。

知り合いから頼まれた曲で、聴いてみていい曲だったので引き受けたのだが、これは本気で集中しないと秋までに終わんない。

「ごめんごめん、遅れちゃった」

後半が駄目なら、いっその事最初からやり直すか？

前半からの流れで、後半も似たような感じで行こうとしていたけどそれだと厳しいか。

「もしも～し？」

いや、むしろ後半の弾き方を全て変えるか？　メインにも合わせてそこから……。

飲み物を飲もうと手を伸ばしたら、さっきまでそこに置いていたコップがどこにもない。

変だと思って目線をノートから上げると、いつの間に来ていたのか泣き黒子（ほくろ）が左目の下にある爽やかな男がニコニコしながらこちらを見ていた。

つか、今飲んでるの俺の頼んだ飲み物じゃねぇか。

「やっと気付いてくれた。久しぶりだね孝介！」

「悪い、曲に集中してて全然気付かなかったわ。久しぶり、そして飲み

物を返せ桐生」
イヤホンを外してノートを閉じてカバンに仕舞うと、奪い取った飲み物を飲む。
……ほとんど残ってねぇし。

桐生桜介（きりゅうおうすけ）

俺と同じ箏を弾く男性奏者で、確か箏では強豪と言われている明陵高校に進学していたはず。
本来ならイケメン男子たちと一緒に、急遽組まれたという合同勉強会の方に行く予定だったのだが、桐生が神奈川に来るから会おうという連絡があってこっちを優先したのだ。
「それにしても今日は楽しかったよ、友達がいっぱいできたし」
「へぇー、どっか遊びにでも行ってきたのか？」
「うん？　合同勉強会で姫坂側から追加で呼びたいって頼まれた時瀬？　だっけ。そこの箏曲部に男子がいっぱいいたんだよ！　いやぁ、とてもいい人たちだった」
あっぶねー。
今日の合同勉強会って、明陵高校も入っていたのか。姫坂女学院しか聞いていなかったから、ノコノコと今日行っていたら面倒な事態は避けられなかった。

ナイスだ、桐生。

「確かに、あの連中とはお前仲良くなれそうだな」
「なんで孝介が彼らを知っているの？」
「俺もその時瀬高校の箏曲部員だから」
あ、店員さん。レモンティーお願いします。
空のコップを渡して注文すると、机の上にあった俺の右手をガシッと桐生に掴まれた。
すぐに振りほどくが、今度は身を乗り出して俺の肩に手を乗せてく

る。
「なんとなく予想着くけど……その手邪魔」
「ずるい、僕とも一緒に弾かせてよ!!」
「違ぇーから」
あ、レモンティーどうも。
さて、目の前のこいつにどう説明したものか。
「でもでも、中学ですぐに部活を辞めたのに高校でまた箏曲部に入るなんて、よっぽど周りが巧いんじゃないの？」
「一人別格なのはいるな。でも他はてんで駄目、合わせる価値すらないよ」
バッグの中から音楽プレイヤーを取り出して、桐生の前に置く。
「この前、試しで部員と一緒に弾いた『龍星群』が入ってるから聞いてみなよ？」
「本当に!?　孝介の演奏が聞けるなんて今日は本当にいい一日だ、出来れば生で聞きたかったけどそれは今度の楽しみに取っておくよ」
桐生が胸ポケットからイヤホンを出して、コネクタを俺の音楽プレイヤーに繋ぐと目を閉じて聴き始める。
桐生も俺ほどじゃないけど、一度集中してしまえば周りの音が気にならないタイプだ。
『龍星群』が終わるまでの約七分間、俺は肘をついて外の景色を見ていた。

コトッ。

音がしたので視線を桐生に向けると、笑っていた表情が一変して笑みが消えていた。
「一七弦を弾いているのが孝介の言う別格の人か。それ以外は申し訳ないけど、基礎すら出来ていない。これじゃあ『龍星群』じゃなくて、それに似せた偽物だね」
「そっ、この実力で俺が一緒に弾くと思う？」

「う～ん、確かに孝介の演奏だと曲にすらならないかな。でも、それならなぜ部活に入ったの？　大会に出るだけなら、部活に入らなくても今まで普通に出てたじゃん」
　やっぱり、そこを突いてくるよな。
「俺が部員になる前、この人たちが『龍星群』を演奏していたのを初めて聞いたとき、あまりのバラバラさに驚いた。一人が際立って上手いけど、他の人は触ったばかりのような初心者ばかり。途中でリズムもおかしくなるし、音の強弱も変。……でも、終盤の一コト」
「あ～、最初はずれていたけど後半にリズムが変わった」
「久しぶりに鳥肌が立った」
「!!?」
　そう、鳥肌が立ったのは一年前の全国箏曲コンクールで聴いた『――――』。
　それを最後にここ最近は全然そんなことはなかった。
　なのに、粗削りなイケメン男子が鳴らした一音。
「桐生に聞いてもらった曲ではそんなことが起きなかったけど、確かに一度はその音を聴いたんだ。だったら、まぐれでももう一度聞きたくなる」
「……だから入部したって？」
　無言で頷くと、桐生が大きなため息を吐く。
「僕としては孝介が部活に入って嬉しい反面、練習とはいえ一緒に弾いた時瀬高校の部員たちに嫉妬を覚えるよ」
「桐生と弾くのは全然構わないよ」
「じゃあ!?」
「でも、お前が周りを引っ張って上手く個性を出させようとしたところで、お前の高校の部員の中に俺と一緒に弾ける人が何人いる？」
　その言葉に黙り込む桐生。

全国常連、それも上位のだ。
そんな高校でさえ、俺と弾くのを嫌がる人は大勢いる。
事実、俺の名前で推薦を持ってきた高校もあったけど、実技試験の演奏で弾いたら簡単に落ちた。
桐生のような人が稀なのだ。
俺が誰かと本気で演奏するっていうのは、高校を卒業するまでないのかもしれないな。
「でも、僕は諦めないよ。孝介と一緒に弾く機会はまだあるんだ。その時に絶対笑わせてやるんだから!」
「はいはい、期待しないで待ってるよ」
俺が苦笑いしながら適当に返すと、向こうも頬を膨らませて『本気なのに』と溢(こぼ)していた。
その後は最近の近況だったり、雑談をしながら夕方まで過ごしていたがゆっくりできた週末だったとだけ言っておく。

つか、あいつに飲まれたレモンティーの代金請求するの忘れてた。
今度、会った時絞める!!

12話

「お、おいチカ。どこ行くんだよ」
「自主練、イメトレ」
バタンッ。
「あ、あの。えっとぉーー」
「泣くなコータ」
三人組がオロオロとしている中、美人少女が眼鏡君に近付く。
「あの、先輩――――……」
「ごめん、僕もちょっと……」
ガチャッ、と眼鏡君が出ていくとすぐにギャル娘が部室から出ていく。
合同練習会に行く前日と打って変わって、今日は随分とギスギスしているな。
片耳にイヤホンをつけながら練習風景を見ていたが、イケメン男子たちはそもそも練習方法を間違えている。
外で聞いているとよく分かるが、リズムに一定性がない。
お互いに相手の音が聴こえてから弾く、相手の指を見て弾くなんてやっていれば一生できるわけがない。そんなものは歪な繋がりで奏でられる不協和音だ。
曲がりなりにも、合奏というモノはそんな見せかけで曲になるものじゃない。
今日は、まともな練習になりそうにないな……。

翌日。
今日も望み薄だろうなぁと思いながら部室の扉を開けようとしたら、バタンと扉が勝手に開いて眼鏡君が飛び出してきた。
「ごめん！」
飛び出してきた人に文句でも言ってやろうとしたが、それが眼鏡君

だったこと、そして焦っているような表情を見て息を吐くだけに止(とど)まった。
「今日も練習はなしですか？」
中に入ると、イケメン男子と今出て行った眼鏡君以外全員集まっているようだ。
「そんな訳ないでしょ。今、倉田は仲直りをしに行ってるところなんだから少し待ってなさない」
「断言するんですね？」
「当たり前でしょ」
――――まただ。
ここの人たちは、なんでこんな真っ直ぐな眼を出来る？
わけわかんねぇ。

「あ！　二人とも来た！」
「ね、あたしの言った通りでしょー♪」
本当に二人揃って来たよ。
片耳にイヤホンを挿して音楽を聴いていると、部室の外で待っていた部員たちの声が聞こえてきた。
「よかった、仲直りしたんだねー」
「あ〝？　別にケンカとかしてねぇし」
「分かってる、分かってる」
「あんたたちがギクシャクしてるせいで練習遅れまくってんだからー。ね、鳳月ちゃん」
「明日からまた朝練導入するつもりなのでよろしく」
朝練？
なるほど。初心者が『龍星群』を弾けるからには絡繰(からく)りがあると思ったけど、ばっちゃんのところ以外でも練習してたってわけね。
「え〝っ、まじ……？　鳳月さん」
「大マジよ」

「わーい、久しぶりだね。朝練!!」
「朝練て、何時くらいからやんの？」
次々と部室に人が入って来て、最後に眼鏡君が部屋に入るとすぐに驚きの発言をする。
「あのさ、僕やっぱり全国行くの無理だと思うんだ」
「――――え……？」
今の実力で全国？
冗談じゃないとしたら、随分と夢を見過ぎだ。
「神奈川トップの姫坂は、はっきり言ってうちの箏曲部よりはるか上にいる。現実的に考えてあの上を行くなんて無理だと思う」
あぁ、合同練習で行った姫坂の曲を聴いたからの昨日か。
「――――今のままじゃ、僕たちが姫坂と同じ努力をしたって差は絶対に縮まらない。奇跡なんか起こらない、姫坂の何倍も、何十倍練習しても勝てるか分からない。どんなに努力しても、泣く確率の方がずっと高い。全国は甘くない」

そうだ、全国は甘くない。
桐生の実力があっても、中学のコンクールで優秀賞すら逃したことがあるんだ。
君たちの練習方法じゃ、美人女子以外全国なんて言えるレベルじゃない。
「――――でも、それでもやっぱり僕は、ここにいるみんなと一緒に全国を目指したい」

……普段なら笑い飛ばすとこなんだけど、眼鏡君の雰囲気がね。
静かな眼をした眼鏡君が、本気だってことは伝わってくる。

「おいメガネ、これ外すぞ」
「え？」
「何か新しい紙くれ」

壁に貼ってあった『目指せ全国！』の紙を外して、机の上に眼鏡君から渡された紙を机の上に置く。
「つし、一人一文字な」
「それ足りなくね？」
長髪ボーイが指で数えたが、前に書いてあったのは感嘆符を含めて六文字。
七人で書くには一文字足りていない。
「「大丈夫、三文字足せば」」

ここでも息ぴったりとは。
お互い睨み合っちゃってるけどお似合いだよ、お二人さん。
でも、三文字？
「やっぱ最初はたけぞー先輩だねっ、はい！」
天然君がマッキーを眼鏡君に渡すと、迷いなく何かを書き始める。
「勝てるって分かってる勝負なんて、一番つまんねーもん。なっ？」
「一人で頑張んだったらちょっとキツイけど、みんないるし。なっ？」
「厳しいのは苦手だけどっ、俺も本気で頑張ってみる！　はい、ヒロ先輩！」
長髪ボーイ、おデブ、天然君と順番に書いて次にギャル娘がマッキーを受け取る。
「さんきゅー。あ、あとそうだ。言ってなかったけど、今日からあたし副部長だからーよろしく」
「「え〟!!?」」
気軽にとんでもないことを言っていたが、そんな簡単に新入部員が副部長？
まぁ、ここにいる二年生は眼鏡君とギャル娘だけという点を見れば分からなくもないけど。
「なんかあったらヒロ先輩に相談おし、かわいい後輩諸君」
「ヒロ先輩すごーい」
「はい、鳳月ちゃん。二文字何足すの？　びっくりマークとか？」

「いえ……私の目標は元々こうだったので。私一人の力じゃ無理だけど、みんなと一緒なら。でしょ？」
ギャル娘から美人女子、そして最後にイケメン男子の手に渡る。
「目標は、少しでも高ぇ方が面白ぇかんな！」
さて、何を書いたのかと壁に寄りかかったまま壁に貼るのを待っているとイケメン男子からペンを投げ渡された。
なんで？
「ほら、最後はお前の番だから早く書けよ」
「何言ってるんだ？　俺は公式の手合いで一緒に弾かないって言ったはずだけど？」
「そんなもん、お前の口からごめんって言わせて一緒に弾かせっ――モガ!?」
三人組がイケメン男子の口を塞ぐと、眼鏡君が今度は口を開く。
「確かに言ってたね」
「だったら――」
「でも、君は僕たちと同じ時瀬高校の箏曲部の仲間だ」
……仲間？
「一緒に大会に出なくても、神崎君も一緒に練習して同じ時間を過ごす仲間だ。だったら、箏曲部の目標を、同じ部員である君にも書いてほしい」
「生意気でも、あんたは箏曲部の後輩なんだから早く書きなさいよ」
眼鏡君だけじゃない、ギャル娘。他の人も全員、普通の目で俺を見て来る。
脳裏に蘇るのは、嘲笑、軽蔑、憎悪。そういった負の視線を向けて来る大人や同年代の子供たち。
何、こいつら？
俺より長く生きてないとはいえ、なんで普通でいられる？

普段の付き合い方で接している俺の態度は？
一度とはいえ、『龍星群』を一緒に弾いたときのお前らの態度はどうした？

――――お前にもいつか、一緒に弾きたいって思わせてくれる仲間が絶対に見つかるはずだ

認めない、認めないよ。爺さん。
こいつらだって、他の連中と同じに決まってる。

「……それで、何を書けば言いわけ？　三文字足すとか言ってたけど、全国の後に何を足す――」

『目指せ全国一位』

紙には、自分が書いた一文字の近くに名前も一緒に書いてあった。
こんなの俺が書くまでもなく、終わりでいいじゃん。
まぁ、眼鏡君の宣言から考えればそれっぽい文字があることにはあるけど。
「これ、俺が書く必要あります？」
「書けよ、お前が書かないと始まらない」
イケメン男子がセロテープを用意しながら、背を向けた状態で言ってくる。
始まらない、か。
そこは終わらないの間違いじゃないか？
これ以上グダグダして、練習時間が無くなるのも阿保らしいからさっさと書いた。
「っしゃ、できた!!」
「貼んの、ここら辺でいーか？」

「あ、もうちょい右！」
「おー、いー感じ！」
もやもやしたのを感じながら、壁に出来上がった紙を貼っていくのを離れたところで見る。
……一瞬、本当に一瞬だけ壇上でここにいる部員と一緒に弾く姿を連想したが、ありえないと一笑に付した。

『目指せ　全国一位へ!!』

13話

改めてみんなで無謀な目標を掲げ、次の朝から本格的な練習が始まった。
「姫坂のいる位置がここだとして、僕たちの今の位置はどの辺だと思う？」
一冊の大学ノートを七人が囲み、ノートに『姫坂』と書いて丸く囲むと武蔵がその場にいるみんなに問いかける。
「どこって……ま――……この辺じゃねぇーの？　百歩譲って」
「えー、もうちょっと上じゃないの？」
愛が『姫坂』の文字から10㎝ほど下に小さな丸を書くと、光太から疑問の声が上がる。
それを見て、武蔵はすっと立ち上がり部室の入口まで歩いて行き、ドアの前でしゃがんで地面を指差す。
「いや、この辺。自分のレベルもよく分かっていないレベルだからね」
一瞬の静寂が生まれ、青筋を立てた愛が武蔵のネクタイを掴む。
「てめぇ、ふざけんなよ。バカにしてんのか？」
「まさか！　まずはちゃんと現状把握しないと」
武蔵の言葉に、実康たち三人組が意気消沈した。
「お……俺らってそこまでレベル低かったのか……。『龍星群』、結構いけてたと思ったけど……」
「おお、鳳月さんもいんのに……」
「上手くなったと思ってたのに……」

『龍星群』は、気持ちと勢いで技術面をカバーしてたとこが多いし、鳳月さんに大分ひっぱってもらってたからね。でも、それじゃ全国では通用しない。『そろえる』、『合わせる』。全国では出来て当たり前のことが僕たちはまだ出来てない。――というか」
真剣な武蔵の雰囲気が霧散して肩から力が抜けると、表情ものほほ

んとした感じになる。
「まだそれ以前のレベル、っていうか……」
三人組の脳天にクリティカルヒットする鋭利な言葉により、実康たちは倒れた。
「た……たけぞー先輩。なんか刃が鋭く……」
「そんなひどかったのか、俺ら……」
その様子を近くで見ていた姫呂は、武蔵の認識を天然のＳとした。
「あ、やっ……ごめん……。とにかく！　まずは今の自分たちの実力と課題を明確にしよう」
それを心配そうに見ていたさとわに気付いた愛が釘を刺す。
「おい、鳳月。言っとっけど、お前俺らに合わせよーとか思うなよ？」
「え？」
「どいつもこいつも、お前と俺らのレベルがどーのこーの言ってっけど、お前ぜってー俺らに合わせーよとすんな。１００％全力で弾けよ」

思わぬ言葉に虚を突かれた顔をしたさとわだが、すぐにいつものすまし顔に戻る。
「当たり前でしょ。なんで私が手を抜かなきゃいけないのよ、やるからには本気でやるわよ。むしろ私、これからさらに上に行くつもりだから追いつけなくて泣いたりしないでよね」
「んだとコラ！　てめーなんぞ瞬殺してくれるわ!!」
「やれるもんならやってみなさいよ」
自分の場所で起きていたことが終わったと思ったら、今度は別な場所で起きている言い合いに武蔵と姫呂は目が点になる。
「なんでそこがライバルになってんの？」
「まあ、いいじゃん」

そんな時にふと溢した光太の一言。
それが、後に自身の首を絞める結果になることを今の光太は予想だ

にしなかった。

「そういえば、鳳月さんが姫坂と同じかそれ以上に凄いのは分かってるけど、神崎君は結局俺らと同じぐらいってことでいいのかな？」

「それは……」

武蔵が言葉に詰まってしまうのは、一緒に弾いた『龍星群』とこの前聞いた『久遠』だけしか知らないからだ。

楽譜にない音を弾いてほとんど滅茶苦茶だった『龍星群』。

片や、楽譜通りに普通に弾けていた『久遠』。

相反する二つの演奏だけでは判断がつかない。

そんな中、口を開いたのはいつも通りの二人。

「ムカつくけど、俺らよりはずっと上手いと思う」

「断定は出来ませんが、恐らくコンクールでも上位を取れるレベルだと思います」

愛だけの言葉だけでは信憑性が薄いが、さとわが肯定したことで信用性が一気に跳ね上がる。

「その理由を聞いてもいいかな、鳳月さん？」

「私も聞きたいかな、鳳月ちゃん」

周りが次々とその理由を鳳月に聞きたがるが、同じようなことを言った愛も鳳月の言葉が聞きたいのか黙ったままだ。

「神崎君が部室でしているのは、弾き方を変えて繰り返し同じ箇所を弾いているだけです。これだけでは何がしたいのか分かりませんが、彼の演奏を聴いた三回。それを踏まえると、なんとなくですが分かったことがあります」

「三回？」

武蔵の言葉にさとわが頷く。

「部室で弾いた『龍星群』、『久遠』。そして、仁科さんの楽器屋で偶然

聞いた曲です」
「そうか、そういえばそうだ」
さとわがノートの近くに置いてあるペンを持つと、武蔵にノートを借りていいか聞いて了承を得たので姫坂と書いてあるページに書き始める
「分かりやすい順で書いていきましょう」
ノートの下の方に『久遠』と書き、姫坂の文字の下に『楽器屋』の文字を書く。
そして、ノートの中央に『龍星群?』と入れてペンを置いた。
「私の所感になりますが、こんな感じになると思います」
「確かに、ノートの中に書かれてる時点で俺らより上手いってのは納得がいくけどよ? ばあちゃんの家で弾いていたあれがそんなに凄いのか?」
実康の言葉に堺と光太がうんうんと頷くとそれに答えたのは、さとわではなく愛だった。
「何の曲かは知らねぇけど、あれに比べれば俺らは……俺らは……まだひよっこだと思う」
余程言いたくなかったのか、後半は歯ぎしりをしながら絞り出すように言った。
「あなたがそこまで分かってるなんて珍しいじゃない」
「ああ〝!? 喧嘩売ってんのかお前?!」
愛の両肩を実康と堺が押さえて止めているのを見ながら、さとわが続きを話す。
「何の曲かは私も分かりません。でも、あれは最初の一音で分かりました。ノートには姫坂の下に書きましたけど、どういった曲か分かれば――」
『楽器屋』の文字を丸く囲み、姫坂の文字の上まで矢印を引っ張る。
「姫坂の練習で聞いた『二つの個性』、あれよりも評価は上がるかもしれません」
さとわの言葉にどよーんとした空気が3人組にのしかかる。
それを見かねたのか分からないが、武蔵が声を上げる。

「だったらさ、今日の放課後に神崎君が来たら聞いてみようよ。いつも何の曲を練習しているのかさ」
「そうだな。つか、なんであいつ朝練来てねぇんだよ！」
今さらな話題に、愛がまた怒り出す。
思い出されるのは昨日の放課後。
壁に各々（おのおの）が一文字ずつ書いた目標を壁に貼っていたのを見ていた時だ。

『俺、朝起きるの苦手なんで朝練はパスします』

部活としては強制ではないため強く言えないが、それでも部室内の空気が凍ったのは確かだ。
当然の如く愛や姫呂が怒ったけれども、最後まで意見を変えることはなかった。
「でもさ、一度だけだったけどまた神崎君と一緒に弾いてみたいね！」
昨日のことを思い出していた一同の中、光太の言葉が部屋に響く。
「たりめーだ、絶対に土下座させて一緒に弾くって言わせてやる」
そんな感じで武蔵とさとわ以外がやる気に燃えている中、二人はその状況を見ながら同じことを思っていた。

まずは自分たちが弾けるようにならないと駄目なんじゃないか？
と。

１４話

「――じゃあもう一回、さんはいっ」

タカタカタダッ。

「ぐあっ、また！」

「何度やっても上手くいかないね……」

朝練をした日の放課後、一昨日と同じような光景が繰り広げられている。

でも、その時と違ってギスギスした感じはしない。

むしろその反対で……。

「おいメガネ、お前俺の音にかぶってくんじゃねーよ！」

「久遠君こそ、ちゃんと一定のリズム刻んでよ！」

「あ゛!? てめぇが――」

どんっ。

「これメトロノーム。持ってきたから今日からこれ使って」

「――ありがとう鳳月さん」

熱くなりそうなタイミングで、美人女子がメトロノームをイケメン男子と眼鏡君の間に置く。

タイミングを取るという点では確かに最適かもしれない。あまりやりすぎると、他のパートにも引きずってしまうから頼りすぎもよくないけど……。

今の二人なら、丁度いいか。

「め、めとろ……？　何だこれ？」

イケメン男子がメトロノームの針を触ると、一定のリズムを刻みながらカチッ、カチッと音が鳴る。

「これでリズムを体に叩き込もう」

「すげぇかっけー!!　最終兵器じゃん」
　美人女子が部室内で練習している他の人たちを見回していると、それに気付いた眼鏡君が声をかける。
「何か気になることあった？」
「あ、いえ。みんなに一通り手を教えてから、最近は自分の練習をしていたのでどんな感じかなと」

　シャン、シャン、ザー、タララララン。

「ふぃーっ、少し分かってきたかも！」
　イケメン男子と眼鏡君の練習中も聞こえてきたわけだけど、さすがに無視できない。
　テンポが独特過ぎるというか、なんというか……。
「水原君、手はともかくリズムがかなりあいまいみたい。十六分音符から四分音符になるところとか、注意した方がいいかも。
「？　……？　しぶおんぷ？」
　目が点になっている天然君を見かねたのか、眼鏡君が楽譜を広げて説明を始める。
「水原君。ほら、こことかかな。ここまで十六分音符で、次の小節で四分音符に変わるんだ。この二つのリズムが違うのは分かる？」
「あっ、うんうん！　こっちは音符が縦にぎゅっとなってるから速く弾いて、こっちはそうじゃないからゆっくりと弾けばいいんだよね？」
　音楽の知識がない状態だったらその解釈で全然問題ないんだけど、大会で弾こうとしているんだったらその認識だけではちょっと甘い。
「……うん？」
「まあ、間違っては……ない……？」
「何言ってんの、お前？」
　眼鏡君と美人女子は、すでに当たり前になっているからそんな反応になるよな。
　イケメン男子も同意するかと思ってたけど、違うんだ？

「でも、ただ適当に速く弾いたりするんじゃなくて、えっと基本のテンポがあって……」
「？　……？」
「お前も何言ってんの？」
「そういや俺もリズムとかよく分かんねーな」
　ごめん、イケメン男子は完全な感覚派だったか。そりゃ分かるはずもない。
「サネとヒロ先輩は分かる？」
「まぁ、……何となく分かっけど……」
「説明できないわ」
　確かに説明するのは難しい。
　こればっかりは何度も弾いて、聴いて理解するモノだから。
「えっと、じゃあこういうのはどうかな？　ここに四つの区切られた道があります」
「あ、箏の楽譜と一緒！」
「四分音符はお父さん。お父さんは一区切りを一歩で行けるので、四歩で道を渡れます。これが基本のテンポ」
　なるほど、絵でタイミングとかを教えようとするのか。
　片耳につけていたイヤホンを外して、俺も眼鏡君の説明をしっかりと聞く。
「八分音符はお母さん、お母さんはお父さんより歩幅が狭いからお父さんと並んで歩くにはお父さんが一歩進む間に二歩進まなくてはなりません。そして、十六分音符は子供。子供はさらに歩幅が狭いから、お父さんが一歩進む間に四歩進まないと一緒に歩けません」
　……間違ってはいない。間違ってはいないけど……、その表現の仕方だとー――。
「だから十六分音符はただ速く弾くんじゃなくて、お父さんの一歩にぴったり四歩で追いつけるように合わせなくちゃいけない。速すぎたり、遅すぎたら一緒に並んで歩けないからね」
　イケメン男子と三人組が少し俯いて静かになると、眼鏡君も彼らの様子が変なことに気付いたようだ。

「あ、……逆に混乱させ……」
「「十六分音符……!!　けなげすぎんだろう!!!」」
だよね、この表現だとロクデナシの父親と必死な子供という図になってしまう。
「それに比べ四分音符、ろくでもねぇ父親だな！」
「自己中すぎんだろ!!」
「子供がこんな必死に追いかけてんのに少しぐれー待ってやれや!!」
「たけぞー先輩、俺がんばる!!　親子がバラバラにならないよう必死にがんばるよ!!」
「う……うん！　がんばれ！」
親父を越えてやろーぜとか聞こえて来るけど、越えたら駄目だから。
さて、俺も戻るか。
イヤホンを挿そうとすると、天然君がいつの間にか目の前まで来ていた。
「神崎君はいつもイヤホンしてるけど何聞いてるの？」
急に何？
つか近いわ、天然君。
「――いろいろ。今は知り合いに貰った曲を聴いてるけど」
イヤホンを片耳に挿して一音鳴らすが、天然君の離れる気配がない。
両耳に挿してないから入れないとはいえ、ここまで近くにいたら集中できないわ。
「質問には答えたけど、何？」
「一緒に練習しようよ！」
「ねぇーから」
前に『久遠』を弾けるようになったらもう一度合わせると言ったのに、その前に一緒に練習？

しかも、一緒に大会に出ないのに練習するとか時間の無駄でしかない。
「気が散るからそこ退いてくれる？　あまり時間無いし、君たちに構ってる余裕ないんだよね」
「ちょっと、そこまで言わなくてもいいじゃない！」
ギャル娘が立ち上がり睨んでくる。
はいはい、お邪魔虫はいなくなりますよ。
「――お互い練習にならなさそうですね、今日は先に帰ります」
片付けて荷物を取ると、さっさと部室を後にする。
周りが何か言っていた気がするが、両耳にイヤホンしてたから何言ってるかまでは分かりませんよ。
「……少し早いけど、ばっちゃんの家に行って通しで弾いてみるか」

「なんなのよあいつ！」
「練習って言ってたけど、今日も1音ずつ鳴らしているぐらいだったよな？」
「そうだな」
「邪魔しちゃったかなぁ」
姫呂と三人組が騒いでいると、ターンと箏の音が響き渡る。
「愛？」
「俺たちが『久遠』を弾けるようになったらあいつは一緒に弾くって言った。だったら、そん時に言いたいことを言えばいい。今の俺たちじゃ、何言っても伝わらないと思う」
そう言った後、再び楽譜と格闘を始めるのを見て四人も練習に戻る。
それを見ていたさとわが愛に向かって笑みを浮かべると、近付いて一言。

「そこ、間違ってる」
「んが！」

15話

部室に寄り付かなくなって早1ケ月。
えっ、急に時間が飛びすぎ？
しょうがないじゃん、俺にも用事というモノがあるし毎日部室に顔なんて出せないよ。
つい先日も、断れない頼み事で週末は休みなしだったから正直今日の学校もさぼろうとしたんだけど……ばっちゃんから学校に行くようにとの指令が降(くだ)れば、『ｓｉｒ』と答える以外に選択肢はない。
でも、今は新しい曲の構想でいっぱいいっぱいだから授業を受ける気にもなれないし……睡眠学習でいこう。この素晴らしい状態のときに余計な雑音を入れたくない。

「――――く――」
……。
「かん――――く――」
……何？
「神崎君！」
体を起こすと、目の前に眼鏡君がいた。
なんで？
「……倉田先輩、教室間違えてますよ。ここは1年の教室です」
片耳のイヤホンを外して伸びをすると、窓の外がオレンジ色になっていた。
あぁ～、思った以上に寝すぎたみたいだな。
「間違えてないよ、君を探してたんだ。部活にも全く来なくなるし、みんな心配していたんだよ？」
「それはないでしょ、何が目的ですか？」
あのメンバーが俺を心配するとか絶対ありえない。
用事を優先するため部活に行かないで直帰していたけど、果たして

この1ヶ月でどこまで弾けるようになったのやら……。
「……君が僕たちをどう思っているかまでは聞かないけど、急に来なくなったら皆心配ぐらいはする。それに君に伝えないとおかないといけないことがあるから」
眼鏡君がポケットから一枚の紙を取り出すと、それを渡してきた。
何々〜？
「山奥にある民宿で三日間の夏休み合宿をするんだ。その紙に待ち合わせ時間とか必要な物を全部載せてあるから君にも来てほしい」
合宿って……俺行く必要なくね？
むしろ険悪な雰囲気になること間違いなしだろうに……。
「俺は大会に出ないって言っているんですが、これ行く必要性ありますか？」
「あるよ」
紙をひらひらして眼鏡君に問いかけると、真剣な顔してすぐに返答してきた。
「前にも言ったけど、神崎君は箏曲部の仲間だ。例え大会に出ないからって、僕たちがどんな練習をしているか君には確認する義務がある」
「変なことを言いますね、部長だからって部員に強制する権限はないと思いますが？」

「僕たちが『久遠』を弾けるようになったら、君の『久遠』を弾いてくれる約束だったはずだよ」

――――あ〜〜〜、そういえばそんなことも言ったような……。
でも――――。
「弾けるようになったんですか？」
「それは……まだ……」
「はぁ〜。弾けるようになってから来てください、それと――――？」

合宿には行きません。
そう言うつもりだった言葉が紙に載っている地図を見て霧散していく。
山奥にある民宿、自然豊かな場所が貸し切りで2泊3日。
これは別にいい。
問題は、山を下りた近くに『――――――』があるという点だ。
大会前に一度行くつもりでいた。
いつにするかは決めていなかったけど、合宿とやらの帰り道に『――――――』に寄ることもできる。
こうなると、合宿とやらについて行った方が平行線で終わりそうにない話も終わるし、現状の眼鏡君たちの揃え具合も分かるか……。
「――すみません、気が変わりました。どこに朝何時集合ですか？」
「えっ？　ホントに？」
「1ヶ月でどこまで弾けるようになったのか、確かに聴いてみるのも一興と思いましたので」
生真面目な眼鏡君に適当な嘘をついて後々面倒になるのも避けたい。
本心ではないが、今言ったことも別段嘘ではないし一種の休日だと思えば木々に囲まれた民宿というのも悪くはない。
それで集合場所は？　学校の校門前と。
時間が朝――8時!?
え、そんなに早いの？　起きれるかなぁ……。

教室を離れた倉田は安堵から深い溜息をついていた。
なぜなら、合宿に行く条件として先生から提示されたのが部員全員の参加だったからだ。

「あ、言い忘れてたけど倉田」
「はい？」
　鼻唄をしながら歩いていた滝浪がふと振り返り、僕に向かって難題を落とす。
「合宿に行くのは賛成なんだが、箏曲部全員の参加が条件になるからちゃんと話し通しておけよ～？」
「??　はい勿論です」
「……まぁ、いっか。じゃあこっちも手続き進めておくから、詳細決まり次第俺にも連絡しろよ～」
　そう言うと、滝浪は今度こそ職員室を出て行った。

　あの時、箏曲部が全員行くのは当たり前のことだと思いながら合宿の準備と練習をしていたんだ。
　そして、滝浪先生に詳細を伝える為もう一度職員室に向かって気付いた。僕が部長として、部員のことを全く見ていないことに。

「先生、合宿の日取りと場所が決まりましたので連絡に来ました」
「お～、そうか」
　滝浪先生が机の上にあった紙を適当に裏返して、そこに僕からの連絡事項をメモしていく。
　一頻(ひとしき)り話すと、滝浪先生からの質問に答えていき１０分ほどして滝浪先生がペンを置いた。
「ん～、これぐらい決まっているなら大丈夫そうか」
「それなら――――」
「しっかし、お前よくあの問題児を説得できたな～？」
「問題児……ですか？」
　久遠君はわりと乗り気だったような気がするけど。
「お前らと大会に出ないって、部室に行っても練習をしていないだろ

う？　そんな浮いている神崎を説得するのは一筋縄ではいかなかっただろうに」
神崎……君？　そうだ、そうだよ！
合宿の話が出てくる前から部室に来なくなった彼のことをすっかり忘れてた。
「――あぁ、やっぱりな。あいつが簡単に合宿に行くっていうのもおかしな話だと思った」
滝浪先生が僕の表情から読み取ったのか、紙を机の引き出しに仕舞う。
「全員参加の許可を得ていないんだったらこの合宿の話はナシだ。今回は運がなかったと思って諦めるんだな」
席を立って職員室から出ていこうとする滝浪先生を止める。
「待ってください、必ず神崎君に許可をもらってきます！」
「いや、もらってきますってお前ね」
滝浪先生がため息をつきながら説明する。
「夏休みまでもう2週間を切ってるんだぞ？　学校に合宿申請を提出するのも、直前で出して通ると思うか？」
「今週中、金曜日までには必ず。お願いします！」
頭を下げる僕に、滝浪先生が再びため息を吐く。
「……分かった、取り敢えず保留にしておく。ただ倉田、部長のお前が部室に来ないとはいえ、正式な部員の神崎を忘れていた。減点1だ、つまらないことにはならないでくれよ？」
滝浪先生の今までにない言い回しに違和感を覚えるが、取り敢えず合宿の中止という最悪の状況は免れた。
あとは、神崎君に合宿の参加を認めてもらうように何とか説得しないと。

職員室を急いで出た後、その足で1年生の教室に向かったが神崎君は諸事情によって休み。
その後も毎日1年生の教室に通っていたけど、今日まで神崎君が登校してくることはなく焦りだけが募り気が気でない日々が続いたが――。
「良かった、神崎君も参加してもらえて」
箏曲部のみんなに神崎君のことを伝えたとき、来栖さんは少し嫌な顔をしてたけどそれでも神崎君は絶対に連れて行くって他の皆に説得していた。
『ムカつくし生意気だけど、後輩のあいつだけ除け者なんて絶対に許さない』

以前姫坂との合同練習の帰りに滝浪先生に言われた。
部長である僕は、まず周りを引っ張っていかなきゃいけない。全国を目指そうってみんなに言い始めたのは他ならないこの僕自身だ。
「滝浪先生の言う通り、部長失格じゃないか」
思うところはある、それでもみんなが集まるせっかくのチャンス。
何としてでも今回の合宿で僕たちの弾く『久遠』を神崎君に認めてもらう。
話はそれからだ。